外国人の子どもたちを地域ぐるみで育てる(Ⅱ)

平成21･22年度
広島大学地域貢献発展研究

［滞日日系ブラジル人児童生徒支援のための
地域ネットワーキング再構築の試み］

研究成果報告書

研究代表者
広島大学大学院教育学研究科
兒玉　憲一

執筆者一覧（五十音順，肩書きは平成 23 年 3 月 31 日現在）
芥川　亘　　（広島大学　院生）
伊藤　美智代（ワールド・キッズ・ネットワーク　代表）
猪八　重涼子（広島大学　院生）
川上　奈都希（広島大学　院生）
久保　明日香（広島大学　学生）
黄　　正国　（広島大学　院生）
古賀　礼子　（広島大学　院生）
兒玉　憲一　（広島大学　教授）
高田　純　　（広島大学　院生）
武内　綾　　（広島大学　院生）
舘野　一宏　（広島大学　院生）
田中　千晶　（広島大学　院生）
谷渕　真也　（比治山大学　助教）
浜田　明子　（広島大学院生）
間瀬　いく　（東広島市「ヤッチャル」スタッフ）
山村　崇尚　（広島大学　院生）

＜表紙の写真「サンパウロ市の象徴」＞
【左上「バンデイランチス像」】
　ブラジルが植民地だった時代に国土の奥地を探検し，サンパウロ市の基を築いた奥地探検者たちの像。かなりでかい。休日になると，子どもも大人もこの像によじ登っている。いや，よじ登っちゃだめだろ（特に大人！）。
【右上「フェイラ」】
　フェイラは「青空市場」のこと。通りを通行止めにし，果物，肉，野菜，日用品などの出店が立つ。はっきり言って，めちゃくちゃお買い得。　通行止めになる通りは曜日によって違う。「金曜フェイラ」で新鮮な卵と刺身を買ってくるのが恵子ちゃんの最近のブーム。
　【左下「カルナヴァウ（カーニバル）」】
　サンパウロ市で今年の２月に行われたカルナヴァウから一枚。写っているのは，最もファンのガラが悪い（笑）「ガヴィオインス・ダ・フィエウ」というサンバチームの姉ちゃん。ちなみに，優勝を逃した当チームのファンは当然のように暴れまくってあれこれ壊していました。
　【右下「サントスＦＣ優勝」】
　サンパウロ州のサッカー王者を決める「パウリスタオン」リーグの決勝戦で優勝したのは，サンパウロ州サントス市に拠点を構えるサントスＦＣ。あの三浦カズが一時期所属していたことでも知られる名門チームだ。ちなみに，サントス市と言えば，日系移民がぞくぞくと入港した港町としても有名。
　以上，ブラジレイロ（ブラジル男性）やブラジレイラ（ブラジル女性）なら誰しも日常的になじみの深いであろう４枚をチョイスしてみた（インターネットの画像から）。
（デザインと文：兒玉　拓世氏　在サンパウロ市）

目　次

はじめに
第１章　本研究の概要 …… 1
　第１節　研究の目的 …… 1
　第２節　研究の組織と経緯 …… 1
　第３節　研究の成果 …… 2
　第４節　今後の課題 …… 3

第２章　学生ボランティアによる教育的心理的支援に関する研究（研究１）… 3
　第１節　ピア・サポート教室活動 …… 3
　第２節　集住地域の先進的取り組みの視察研修 …… 10
　第３節　ボランティア養成研修会 …… 22

第３章　支援者ネットワークの再構築に関する研究（研究２）…… 27
　第１節　呉市帰国・外国人児童生徒教育連絡会 …… 27
　第２節　呉市ブラジル人児童生徒の保護者会 …… 30
　第３節　教師対象の研修会 …… 32

第４章　ブラジル本国との連携に関する研究（研究３）…… 35
　第１節　カエル・プロジェクトセミナー　in　可児市 …… 35
　第２節　カエル・プロジェクトセミナー　in　広島 …… 38

はじめに

この冊子は，平成21･22年度広島大学地域貢献発展研究プロジェクト「滞日日系ブラジル人児童生徒支援のための地域ネットワーキング再構築の試み」の研究成果をわかりやすく紹介するためにまとめられた報告書です。

この冊子は，平成 17 年度広島大学地域貢献研究「滞日日系ブラジル人児童生徒のための地域ぐるみの教育・心理的支援に関する研究」研究成果報告書の続編という意味で，「外国人の子供たちを地域ぐるみで育てる（Ⅱ）」としました。なお，平成17年度の冊子は，ネット上で，「広島大学学術情報リポジトリ」に入り，「こだまけんいち」で検索すると，全文をダウンロードすることができます。この冊子も，いずれ同じサイトに掲載される予定です。

第１章　本研究の概要

第１節　研究の目的

本研究の目的は，以下の３つです。

第１の目的は，学生ボランティアによる滞日日系ブラジル人児童生徒に対する教育的心理的支援，とくに６年目を迎えたピア・サポート教室の活動の方針や支援方法の再検討や修正を行うことです(研究１)。

第２の目的は，呉地域の支援者ネットワークの中核を成す連絡会及び保護者会の活動が継続するための課題や介入方法を明らかにすることです（研究２）。

第３の目的は，日本からブラジルに帰国した児童生徒の再適応を支援するブラジル・サンパウロ市の「カエル・プロジェクト」代表Dr. Kyoko Yangida Nakagawaと連携し，母国への帰国を予定している児童生徒への支援方法を明らかにすることです（研究３）。

第２節　研究の組織と経緯

上記の目的のために，以下の研究チームが組織されました。

研究代表者は，兒玉憲一（広島大学・教授）でした。

研究分担者は，広島大学から倉地曉美教授，栗原慎二教授，内野悌司准教授，大塚泰正准教授の4名，呉市から白岳小竹越哲夫校長（当時），呉市教育委員会小竹　術指導主事，ワールド・キッズ・ネットワーク伊藤美智代代表の3名，計8名でした。

研究代表者らは，平成 16 年度より呉市のブラジル人児童生徒を対象に本学の学生ボランティアによる教育的心理的支援活動を開始し，現在に至っています。早いもので，平成23年度で8年目を迎えました。その過程で，平成17年度広島大学地域貢献研究，平成18年度広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト，平成 19・20 年度文部科学省帰国・外国人児童生徒受入促進事業(指定先呉市)などを通して，学校，行政機関，民間支援団体，大学などの支援者ネットワーキングが発展し，「呉市帰国・外国人児童生徒教育連絡会（以下，連絡会)」を中心にした多様な教育的心理的支援活動が展開されてきました。その活動は，「呉市方式」として全国およびブラジル本国の関係者からも注目されるようになりました。この連絡会は，ブラジル人保護者を元気づけ，ブラジル人が家族ぐるみで参加

する保護者会も発足しました。

ところが，平成 20 年後半に，世界的金融危機に伴い景気が後退し，ブラジル人労働者の大量解雇が発生しました。平成 21 年に入ると，景気悪化のあおりを受けて，連絡会や保護者会の活動も危機に瀕しました。そこで，呉市教育委員会，連絡会，さらには長年滞日外国人支援を続けてきた民間支援団体ワールド・キッズ・ネットワークの提案を受けて，本研究プロジェクトを広島大学地域貢献発展研究に申請しました。この 2 年間，大学の教員及び学生が，連携機関等の関係者の協力を得ながら研究を進めた結果，支援者ネットワークの核である連絡会，保護者会，学校内外の教育的取り組みがほぼ従来通りに展開されました。

第３節　研究の成果

「学生ボランティアによる教育的心理的支援に関する研究」（研究１）

ピア・サポート教室(隔週)は，平成 21 年度からくれ市民協働センターを会場として初期日本語教室シランダ（毎週）と共同開催し，参加児童生徒数と参加スタッフ数の増加をめざしました。平成 21 年度の参加児童生徒実数は 26 名，延べ数は 189 名。国籍別内訳は，ブラジル 11 名（42%），ペルー3 名（12%），中国 1 名（4%），韓国 1 名（4%），インドネシア 1 名（4%），日本 9 名（35%）でした。校種別内訳は，就学前 3 名，小学生 11 名，中学生 11 名，未就学 1 名（中学相当）でした。スタッフの実数は 25 名，スタッフ延べ数は 180 名で，立場場別内訳は，民間団体 4 名，外国籍のピア・スタッフ 5 名，学生 16 名でした。これに対し，平成 22 年度の参加児童生徒実数は 25 名，延べ数 360 名と延べ数が急増し，継続的参加すなわち定着傾向が認められました。国籍別内訳は昨年同様だが，校種別内訳は，就学前 3 名，小学生 7 名，中学生 11 名，未就学 1 名（中学相当）。中卒 2 名と中学生以上の割合が増し，受験勉強に熱が入りました。参加スタッフの実数は 42 名，参加スタッフ延べ数は 232 名で，立場別内訳は，民間団体 5 名，外国籍のピア・スタッフ 5 名，学生 32 名と学生スタッフが急増しました。そこで，ボランテイア養成研修会 3 回，埼玉県や岐阜県など先進地域への視察研修を 3 回行い，学生ボランティアの資質向上に努めました。このこともあって，次章で述べるように，児童生徒一人ひとりの心理的成長も顕著でした。

「支援者ネットワークの再構築に関する研究」（研究２）

この 2 年間に連絡会を 5 回，保護者会を 6 回開催し，連絡会を中心に支援者ネットワークが維持発展するために，地域ぐるみのイベントや教育活動を企画・運営しました。保護者会には母国の講師を招くと効果的なことが明らかになりました。また，連絡会と本研究プロジェクトの共催で，支援者ネットワークの担い手である教師対象の研修会を 3 回行い，日本語教育や異文化間教育の啓発に努めました。学校も行政も教職員の異動で外国人児童生徒の担当者の交代が多いため，こうした研修機会は毎年繰返される必要があることが明らかになりました。

「ブラジル本国との連携に関する研究」（研究３）

サンパウロ市で帰国児童生徒の再適応を支援する「カエルプロジェクト」代表の心理学者 Dr. Nakagawa との共同研究を試み，滞日ブラジル人児童生徒の抱える心の問題に関する心理アセスメント方法の開発，さらには心の問題を抱える滞日外国人児童生徒に対する異文化カウンセリングを本研究科附属心理臨床教育研究センターで提供する試みが検討されました。

第４節　今後の研究の課題

本研究の研究 1･2 は，平成 22･23 年度マツダ財団研究助成「滞日日系ブラジル人児童生徒の進路決定支援の試み」（研究代表者谷渕真也比治山大学助教）に継承発展される予定です。研究 3 のうち，心の問題を抱える外国人籍の児童生徒の心理的支援については，本研究科附属心理臨床教育研究センターにおいて異文化カウンセリング研究として継続される予定です。研究成果を学術論文としてまとめ学会雑誌に複数投稿することが当面の課題です。

（担当　兒玉憲一）

第２章　学生ボランティアによる教育的心理的支援に関する研究（研究１）

第１節　ピア・サポート教室活動

１．ピア・サポート教室・シランダ活動の実績

(1) 平成 21 年度

学生ボランティアによる教育的心理的支援のためのピア・サポート教室は，平成 16 年度から呉市総合体育館（オーク・アリーナ）で続けられてきました。しかし，平成 21 度からは，くれ市民協働センターを会場とし，ワールド・キッズ・ネットワークの初期日本語教室シランダと共同開催することになりました。シランダは毎週，ピア・サポート教室は隔週ですが，共同開催とすることで参加児童生徒数と参加スタッフ数の増加をめざしました。

平成 21 年度のピア・サポート教室を含むシランダの活動実績は以下の通りです。

①参加児童生徒：シランダに参加した児童生徒の実数は 26 名，延べ数は 189 名。性別内訳は，男性 18 名（69%），女性 8 名　（31%）。国籍別内訳は，ブラジル 11 名（42%），ペルー3 名 (12%)，中国 1 名 (4%)，韓国 1 名 (4%)，インドネシア 1 名 (4%)，日本 9 名 (35%)。年齢は，3 歳～15 歳。校種別内訳は，就学前 3 名，小学生 11 名，中学生 11 名，未就学 1 名（中学相当）。校区は，4 小学校，3 中学校。校区別内訳は，白岳小 7 名，和庄小 1 名，

広小 1 名，横路小 2 名，横路中 3 名，和庄中 7 名，白岳中 1 名。シランダ開催回数 47 回，参加児童生徒数の平均 4.0 名，範囲は 1～8 名。3 回以上活動に参加した子ども 10 名(38%)，5 回以上活動に参加した子ども 8 名（31%）。
②参加スタッフ：シランダに参加したスタッフの実数は 25 名，延べ数 180 名。性別内訳は男性 10 名，女性 12 名，不明 3 名。参加スタッフは平均 3.8 名，範囲 1～11 名。3 回以上参加したスタッフ 15 名（60%），5 回以上参加したスタッフ 8 名（32%）。立場別内訳は，ワールド・キッズ・ネットワーク 4 名，外国籍のピア・スタッフ 5 名，広島大学学生（心理）9 名，広島大学学生（日本語教育）3 名，広島大学学生（総合科学）1 名，広島国際大学 3 名。

(2) 平成 22 年度

平成 22 年度のピア・サポート教室を含むシランダの活動実績は以下の通りです。
①参加児童生徒：シランダに参加した児童生徒の実数は 25 名，延べ数 360 名。性別内訳は，男性 10 名（40%），女性 15 名（60%）。国籍別内訳は，ブラジル 11 名（44%），ペルー4 名（16%），フィリピン 1 名（4%），中国 1 名（4%），インドネシア 1 名（4%），日本 6 名（24%）。年齢は，4 歳～16 歳。校種別内訳は，就学前 3 名，小学生 7 名，中学生 11 名，未就学 1 名（中学相当）。中卒 2 名。校区は，5 小学校，5 中学校。校区別内訳は，白岳小 1 名，明立小 1 名，広小 1 名，横路小 3 名，熊野東小 1 名，横路中 4 名，和庄中 2 名，白岳中 1 名。昭和北中 1 名，東畑中 3 名。シランダ開催回数 55 回，参加児童生徒数は平均 6.6 名，範囲 1～12 名。3 回以上活動に参加した子ども 18 名（72%），5 回以上活動に参加した子ども 16 名（64%）。
②参加スタッフ：シランダに参加したスタッフの実数は 42 名，延べ数は 232 名。性別内訳は，男性 15 名，女性 27 名。参加スタッフは平均 4.2 名，範囲 1～12 名。3 回以上参加したスタッフ 24 名（57%），5 回以上参加したスタッフ 15 名（36%）。立場別内訳は，ワールド・キッズ・ネットワーク 5 名，外国籍のピア・スタッフ 5 名，広島大学学生（心理）13 名，広島大学学生（日本語教育）2 名，広島大学学生（教育）1 名，広島国際大学学生 9 名，比治山大学学生 6 名，北九州大学学生 2 名。
③2 年間の変化：参加児童生徒数の字数は変わらないが延べ数が倍増しているのは，出席回数が増え，定着したためです。平成 22 年度後半には，中学生の割合が増え，受験勉強に熱心に取り組んでいました。その甲斐あって，4 名の受験生が全員合格しました。参加スタッフでは，参加学生数や参加大学が急増しました。ただし，参加スタッフや参加大学が増えた分，活動方針や活動方法を一致させるためにかなりの努力を払う必要があることが明らかになりました。そこで，後述するように，ボランティア養成研修会や先進地域の視察研修を行いました。

2. 事例報告にみる参加児童生徒の変化

子どもたち一人ひとりの成長の様子を紹介するために，主な参加児童生徒 20 名について，学生スタッフの高田　純，芥川　亘，黄正国，田中千晶，山村崇尚の 5 名が，平成 23 年 4 月の時点で 2 年間を振り返り，教室での様子をケースレポート風にまとめてみました。活動への参加状況を通して，子どもたちの成長の様子を具体的に知ることができます。また，短い文章ですが，学生スタッフが子どもたちへの寄せる想いも感じることができます。なお，児童生徒のプライバシー保護のため，名前は匿名（本節限りのアルファベット表記）とし，内容も教室場面での行動観察を中心としました。

Ａ，男性，ブラジル

ＡはＤの弟で 4 歳（日本生まれ）と教室では最年少である。平成 21 年度は計 44 回教室に参加しており，Ｄと一緒に活動に参加している。活動では，日本語やカタカナのパズルや，かるたやポルトガル語と日本語が書かれたカード等を用いて学習している。初めの頃は勉強は嫌がっていたが，徐々にひらがなや数の数え方に興味を示し，自分から学ぶようになった。また，遊んだ後の片付けが苦手であったが，現在は片付けができるようになっている。Ｅに合わせて遊んでいる場面が多かったが，徐々に「Ａはカードで遊ぶ」等，自分の意見を言う姿が見られている。人手が足らず少し騒いでしまうこともあるが，1 対 1 で関わると教室内でも落ち着いて活動に取り組むことができる。

Ｂ，女性，ペルー

ＢはＯ，Ｋの妹で 5 歳（1 歳頃来日）である。平成 22 年度の冬頃から現在までに 6 回参加している。人なつっこく，年下のＡとは絵カードや言葉のクイズ，ままごとなどして一緒に過ごした。Ｂは幼稚園に通っており，Ａのお姉さんのように接していた。もう少し大きな小学生グループと活動する場面では，やりたいことを言いにくいものの，スタッフのサポートを通して自分の主張をし，一緒に活動に参加することが出来るようになっている。

Ｃ，男性，韓国

Ｃは５歳頃来日，小学１年から活動に参加し始めた。初めのうちは父親と離れず一緒に勉強し，少しずつ新しい言葉を学んでいったが、慣れてくるとスタッフと１対１で勉強できるようになり、同世代のＤやＥと一緒に遊べるようになった。最初は遊びだすとなかなか勉強に戻れなかったが、少しずつ勉強と遊びの時間を自分で区切れるようになり、充実した時間を過ごせるようになった。Ｃにとって韓国語が第一言語であり，教科だけではなく、日本語の勉強も同時にしなければいけなかったという点で、日本語を第一言語とする外国人の子どもたちと違った勉強内容だったといえる。シランダに参加して 4 ヶ月後には、Ｃの「話し言葉」が著しく定着し、日本語のコミュニケーションが徐々に身に付いていった頃，ようやく「日本語の勉強」から本格的な「国語の勉強」に移行しつつあった。このような変化は、小学校での適応に大きく寄与していると考えられる。平成 21 年度のみの参加で計 24 回であった。

Ｄ，男性，ブラジル

Ｄは小学 3 年生（日本生まれ）で，Ａの兄である。小１の頃から活動にほぼ毎週参加しており，平成 21，22 年度の参加回数は教室で最多の 85 回であった。毎回教室には必ず宿題を持ってきて，自分で自分のペースを決めて勉強している。人懐っこくスタッフにも積極的に関わる気持ちがある。遊びの場面では，スタッフと思いっきり体でぶつかったり，玩具を持ってきてＥ達と一緒に遊んだ。Ｅや弟のＡが参加し始めてからは，我慢や衝突する場面も度々あったが，譲る，仲直りの方法を探す，弟の気持ちを代弁するなど，同世代の友人，あるいは兄弟関係の中で成長した面もみられるようになった。スタッフやＡやＦと話している輪に入った場面では，サンパウロに行った時の話など，自分のルーツについても少しずつ語るようになっている。Ｄは保護者会にも毎回父親や弟のＡと一緒に参加し

ている。

E，男性，日本

Eは小学3年生（日本人）であり，小学2年生頃に通う小学校の違うDに誘われる形で活動に参加するようになった。平成21，22年度で計70回教室に参加しており，教室参加の中心的メンバーとなっている。活動では，学校の宿題や教室の歴史や地理の教材で学習している。初めは勉強道具を持って来なかったり，持ってきても勉強しなかったりといった様子が見られたが，歴史の教材などで楽しく勉強できるようになると，徐々に自分の勉強道具を持参するようになった。また，持参した宿題にまず取り組んでから遊ぶというように勉強と遊びの切り替えができるようになった。遊びの中では自分自身のことやゲームのこと，家族のことについて話した。教室内で大声を出すなど場に不適切な様子の見られた時期もあったが，最近では遊ぶ時は勉強している人の邪魔にならないように教室外に出ることができ，ある程度静かに遊ぶことができるようになっている。現在はAのお兄さん的存在となって一緒に遊んでいる。

F，男性，ブラジル

Fは小学3年生（日本生まれ）である。平成21年度には断続的に活動に参加するが途絶え，平成22年度の冬頃からは継続的に参加しており，現在までに16回参加している。参加当初から，同年代の子どもたちと一緒に勉強や遊びをし，スタッフが声をかけるとすぐに一緒に遊ぶなど，人なつっこい様子だった。参加するうちに，遊びを仕切ったりわがままを言うことで衝突することがあった。しかし最近は，Eとごっこ遊びをする際にも，彼らが主役を演じている時は順番を待つなど，相手の気持ちを少しずつ理解できるようになってきている。加えて，年少児の面倒を見ながら一緒に遊ぶようにもなった。また学習面でも，自ら宿題プリントを持参して，スタッフから教えてもらい，間違えたところを訂正するなど，急成長している。

G，女性，フィリピン

Gは小学6年（来日時小学5年生）でQの妹である。小学6年生の夏頃から現在までに13回参加している。人見知りがあり，姉のQと一緒にいることが多かった。しかし，体を動かすことが好きでボールを投げたりダンスをすることで笑顔が見られるようになった。その頃から発話が増えはじめ，スタッフと漢字の勉強やかるたなどの遊び，対話を通じた交流も増えた。秋頃には，自分もわからないと自主的に日本語の勉強に参加する場面も見られた。

H，女性，日本

Hは中学2年生（日本人）であり，Mに誘われ参加するようになった。平成21年度は計3回，22年度は計15回教室に参加している。教室では英語の宿題に取り組んだが，周囲の様子が気になりやや集中できない様子であった。3月のワールドフェスティバルでは，中学生5人でダンスを披露するため，活動の前の時間や終了後に練習をしていたことから参加回数が増えた。ダンスの練習ではどう踊ったらいいか分からない様子で，他の子の輪にやや入りにくそうな場面もみられた。少し前から継続して参加しており，まだ慣れない

部分もあるようだが，Ｑと教室の子のバースデーカードを一緒に作るなど徐々に打ち解けている様子も見られる。

Ｉ，女性，日本

Ｉは中学２年生（日本人）であり，Ｍに誘われ平成 22 年４月より参加するようになり，現在までに計 12 回教室に参加している。最初，勉強道具を持ってきていなかったが，２回目からは勉強道具を持参した。親から高校受験用の問題集を買ってもらっており，教室では数学や英語の問題集を持参して学習している。受験用の問題集のため，まだ学校で習っていない内容もありなかなか集中力が続かない。しかし，本人は塾で勉強するよりも教室で勉強した方が理解しやすいとコメントしている。教室では進路で迷っていることや行きたい高校のこと，家族のことについて話し，自分の考えをしっかり持っている印象。最近では，友人の誕生日を祝うために早めに教室に来るなど，友人のために行動する様子が見られるようになった。

Ｊ，女性，ブラジル

Ｊは中学２年生（日本生まれ）で，姉の勧めで平成 22 年度の冬より計７回活動に参加している。主に数学でのつまずきがあり，その宿題を持って来て問題に取組んだ。やや緊張が高く，賑やかな他の子ども達と交わることがなかったが，女性スタッフが側にいることで和らいでいた。また，活動に弟を連れてきて一緒に勉強したり，仲の良い日本人の同級生と一緒に来るなどして笑顔を見せたり，くつろいだ様子もみせるようになった。時間の途中で同級生の方が落ち着かず，別の場所に向かうようになった。

Ｋ，男性，ペルー

Ｋは，中学２年生（小学４年生時来日）でＯの弟，Ｂの兄であり，現在までに 44 回活動に参加している。平成 21 年度は，学習意欲が低く，落ち着かない様子がみられた。しかし，ＬやＲと出会って以降，カードゲームや夜の教室に一緒に参加する中で表情が良くなり，教室活動に定着し始めた。それからは，騒がしい小学生を注意するなどお兄さん的な役割をとることも増えた。しかし，Ｌが帰国し，Ｒも活動から遠ざかると，同世代友人がいなくなってやや落ち込んだ様子もみられた。同年夏には，スタッフと考えた体を動かす企画を実行するために計画立案，参加者の声かけ，当日の実行など，最後まで投げ出すことなく取り組むことができた。その後，女子グループのパワーに押されること度々だが，Ｔやスタッフの支えもあり，自分のペースで活動時間を過ごしている。学習面では特に英語の成績も上がっている様子で，乱暴だった言葉遣いも丁寧になっている。

Ｌ，男性，インドネシア

Ｌは 13 歳（中学１年生時来日）であり，平成 21 年度に活動参加し始めた時は未就学であった。活動では，スタッフとの日本語学習や，ＫとのカードゲームＬで交流した。初めは表情が乏しかったが，少しずつ笑顔がみられるようになった。活動にも継続的，積極的に参加するようになり，ＫやＲと同世代の３人組で夜の教室まで一緒に過ごしたり，必ず教室に顔を見せに来るなど，少したくましくみえる場面もみられるようになった。その一方，平成 22 年度から中学校に登校し始めるが，夏にはテストの成績と家庭の事情により，学校

をやめることとＬの帰国が決まった。帰国前にはＫにプレゼントをあげたり，世話になった大人達にお礼をして帰国した。活動には計 13 回参加した。

Ｍ，女性，ブラジル

Ｍは中学 2 年生（日本生まれ）で小学 5 年生時から参加しており，平成 21 年，22 年度合わせて 53 回活動に参加している。活動に参加し始めた頃は，イライラをスタッフにぶつけるような場面もみられたが，中学生になり落ち着くようになった。以降，小学生に勉強を教える場面もみられるようになるなど，教室のお姉さん的な関わりもみられるようになった。学習場面では宿題を積極的にする，わからない問題に対してはスタッフに積極的に質問するなど，一緒に考えることも増えた。学習場面以外では，ＩやＨなどの日本人の同級生を連れてきたり，ＱやＯ，Ｎなどとの話やダンスなどを通じて同世代の友人達と一緒に過ごす時間が増えた。保護者会など人が多く集まる場面にはあまり参加したがらないが，活動発表の場でアンジェラアキの『手紙』を歌ったり，フォト・ストーリー・ワークショップの創作活動では自分の気持ちを表現した作品を作ることが出来た。

Ｎ，女性，ブラジル

Ｎは，初参加時中学校 3 年生（日本生まれ）である。平成 22 年度の夏以降，計 14 回活動に参加している。活動では高校進学に向け，受験勉強に取り組んだ。初参加時からＱやＯなどと仲がよく，冬以降はワールドフェスティバルでダンスを披露するため，午前中から仲間達とダンスの練習をした。おっとりした性格のため，友人からいじられることもあったが，3 月に他県から活動の見学に来た人に対し，他の子どもが困っている中で，ユーモアを交え堂々と接し，かつ自身の面接の練習相手の依頼をするなど積極的な姿勢をみせた。また学習面では，苦手教科について，志望校の過去問を持参して悩みを打ち明けることもあった。受験が近づくと落ち着かないこともあったが，今春には高校へ進学を決め，保護者会では感謝の気持ちとこれからの抱負を語ることが出来た。

Ｏ，女性，ペルー

Ｏは，中学 3 年生で（小学 5 年生時来日），Ｂ，Ｋの姉である。平成 21，22 度で合計 25 回参加している。活動参加初期には，勉強についていけない苦しさをスタッフに訴えるも，参加については断続的で，その分陸上部の活動にエネルギーを注いでいた。中 3 になり，ＱやＭたちと日々の出来事や共通の趣味についての話をする中で継続的に活動に参加するようになった。夏にはオープンキャンパスに参加し志望校の壁の高さに立ち尽したり，冬には将来の夢と現実とのギャップにもがく日々が続いた。その間勉強にはあまり手がつかないが，Ｑをはじめ女子中学生達とおしゃべりやダンスをしながら過ごし，子ども同士の関係が深まっていった。3 月には高校進学を決め，合格への喜びを語った。また，保護者会では勉強は苦手だけれども仲間に支えられてここまで来たことや，高校生活への抱負を語った。

Ｐ，女性，ブラジル

Ｐは，初参加時中学 3 年生（4 歳時来日）。高等学校の推薦入試のため平成 22 年 10 月より，本人の希望によりスタッフを通じて活動に参加を始めた。スタッフとの１対１で小論

文対策と面接対策を行った。その際，希望する進路への動機だけでなく，家族に対する想いについても話した。他の子ども達に対しても面倒見がよく，お姉さん的な態度で接していた。計 4 回活動に参加したが，自身の作文が賞を受賞し多忙になったこと，周囲の説得もあり進路を公立高校に切り替えたことにより，活動には参加しなくなった。その後 3 月には高等学校への進学を決めた。保護者会では保護者達の前で周囲の仲間や家族への感謝と，自分の将来の夢について力強く話し，スタッフに感謝の言葉を伝えた。

Q，女性，フィリピン

Qは 15 歳（中学 3 年生時来日）でGの姉である。来日して間もなく中学校を卒業し，高校受験するが不合格であった。高校に再受験するために，日本語教室に通いながら，本活動に参加し始めた。初参加は平成 22 年 4 月で，計 46 回参加している。教室では受験に必要な教科だけでなく，基本的な日本語，小論文等の勉強をした。初参加から 1 ヶ月ほど経つと，スタッフや他の子どもと，趣味や家族，将来の夢など話をするようになった。4 ヶ月後には友人の研究を手伝ったり，冬以降はワールドフェスティバルで披露するダンスの振りつけを決めて友人達をリードするなど，友人と話すだけではなく，援助しながらOやN達女の子の集団をリードするようになった。学習面では，初参加時には数学の計算，漢字の訓読みが苦手で，入試で出題される小論文の作成も困難だった。しかし，分からない漢字はスタッフに積極的に質問し，小論文の作成も添削してもらいながら取りくむなど常に真面目に勉強した結果，今春には志望校への進学を決めた。

R，男性，中国

Rは 15 歳で，活動には計 7 回参加している。不就学で生活環境の狭いRは，活動ではひらがなやカタカナなどの初期からの日本語を学んだ。人懐っこく，LやKと一緒にカードゲームやアニメなどの話題を通じて仲良く楽しく過ごした。家族の転居と共に，呉の活動には参加しなくなったが，時折顔を覗かせることもあった。現在はさらに他県に転居し，リサイクル関連の仕事をしている。

S，女性，ブラジル

Sは初参加時中学 3 年生であった。4 歳で初来日し，小学生の時に帰国・再来日している。活動初期から参加していたブラジル人の兄弟の友人として，平成 18 年冬から，活動に参加。平成 22 年度には高校 3 年生になり，ピア・スタッフとして計 8 回参加した。自身の勉強をこなしながら，後輩の話を聞いたり勉強を教えたりして，子ども達のリーダーとして成長した。一方，高校卒業を控えて，進路や帰国について悩み，学生やボランティアスタッフと何度も話し合い，日本での就職を決めた。保護者会等の活動でも日本語とポルトガル語の通訳や企画の立案・準備を担い，スタッフとして活躍した。平成 22 年度も保護者会に参加し，通訳を務めた。平成 22 年度末にはブラジルに帰国することになったが，その直前に何度か活動に参加し，帰国への不安と共に，大学進学や再来日の希望を語った。

T，男性，ブラジル

Tは初参加時高専 2 年生。平成 18 年度冬から，スタッフの紹介で活動に参加。平成 22 年度には高専 5 年生になり，ピア・スタッフとして計 6 回参加した。中学生を中心に後輩

の相談を聞き，良き兄貴分としてＳと共に子ども達をサポートした。「研究者になって人の役に立つ物を開発したい」と自身の夢を語り，受験期やテスト前には課題を持ってきて自分のペースで勉強も続け，高専専攻科への進学を決めた。Ｔは学部生の学生スタッフと同年代であり，大学生活や家族観，将来の夢について話をする中で，互いに大いに刺激を受けていた。保護者会等にもスタッフとして参加し，「勉強を頑張るためには，保護者や周囲の見守りが必要」と，自身の経験を踏まえて参加者にメッセージを発信し，一つのロールモデルとなっていた。
(この節の担当　高田　純)

第２節　集住地域の先進的取り組みの視察研修

前節で述べたように，ピア・サポート教室とシランダの共同開催，学生ボランティア数や参加大学数の増加に伴い，学生ボランティアの資質向上のため，外国人集住地域での先進的な取り組みについて視察研修を 2 回行いました。以下は，視察研修に参加した学生たちが提出したレポートをまとめた研修記録です。

1. さいたま地域ボランティア視察報告

今回の視察目的は，埼玉県下における民間国際ボランティアによる外国人児童生徒及び保護者に対する日本語教育活動の実態調査を行うことでした。視察に参加したのは，伊藤美智代（ワールド・キッズ・ネットワーク），谷渕真也（広大・心理・院生），濱田明子（広大・日本語教育・院生）でした。平成 22 年 3 月 17 日(木)に，JR 広駅あるいは JR 東広島駅を出発し，同日埼玉県に入り，「こども日本語学習クラブ」（埼玉県富士見市西みずほ台 1-19-2　みずほ台コミュニティーセンター）を訪問。3 月 18 日(金)に，ＮＰＯ法人　Living in Japan 「国際相談コーナー」（埼玉県草加市高砂 1-1-1 草加市役所内）を訪問。3 月 19 日(土)に，「にほんごのへや」（さいたま市浦和区東高砂町 11-1　コムナーレ 9 階　国際交流センター内）を訪問。

①3 月 17 日　「こども日本語学習クラブ」視察　18:00～19：30

スタッフ	８名（内２名が中国人の女性，３名が大学生） 子どもを１対１で見ることは出来ない人数であるが，常に参加しているスタッフが少なくとも２名はいる。また，近くの大学と提携しており，インターンシップ生を受け入れている。（来年度は４名ほど受け入れ予定）
対象となる子ども	12 名（この日は，スタッフの一人が就職を機にこのグループを離れるということと，卒業・進級を祝うために 12 名の子どもが集まった。受験後なので，本来であれば，この時期にはこれほど集まらないとのこと。） 小学生，３歳くらいの子もいるが，中学生が多い。成績優秀な中国人の子（数学・英語で言えば日本の授業内容が簡単すぎると感じるレベル）と初歩的なことにも迷ってしまう子の二極に別れているとのこと。そのため，教科指導に関しては，そこまで困難を感じていないそうだ。電車の駅が近いために，いくつか先の駅からでも高い学習意欲を持って参加している子が多い。また，近隣の同じような教室から，「勉強したい，まじめな子」が紹介されてくることもあるようだ。

その他	自分のやりたい事を聞いて，それをボランティアが見てあげるというスタイルで進められている。「勉強をする場所である」という雰囲気があるせいか，自分で勉強道具を開き，勉強を始める子がほとんどであった。とはいっても，スタッフと子どもたちとの信頼関係が出来ており，暖かい雰囲気の教室だった。片付けやお茶の時間等では，子どもたちが自然に手伝う雰囲気が出来ていた。 テキストやプリントをするだけではなく，理科の実験を行なうなど事前の準備や工夫が必要な事にも取り組んでいる。

（担当：濱田明子）

付記：外国人の子どもに対する日本語学習支援および教科学習支援のあり方について情報を集めるため，埼玉県富士見市の「こども日本語学習クラブ」（代表：松尾恭子さん）を見学した。教室終了後，松尾さんらスタッフと埼玉県での取り組みの様子や，外国人の子どもの学力保障について協議を行った。（谷渕真也）

②3 月 18 日　草加市役所「国際相談コーナー」視察

スタッフ	市役所内にいるのは２人
対象	コーナーに相談にくる人 小学校・中学校に通う子どもたち（高校生も含まれるかは聞き逃したため不明。）
その他	市役所の２階の一角に設けられている。１つの建物の中にあらゆる部署が集まっており，何か手続きで問題が生じた場合，相談にきた人・相談内容とかかわりのある部署の人（例：戸籍係）とスタッフとが直接会って話し合うことが出来る。（毎日いるわけではない） 小中学校に通う子どもは，33 校に点在し，国も学年もバラバラである。市教委が派遣する日本語補助員もいるが，その人たちとは別枠で，学校にも入っている。ここのコーナーにいるスタッフが子どもたちに対応する利点としては，①転入時からの情報を持っているため，抱え込み（気づかなかった…）という自体が防げる。②継続的に関われる。③保険等どこにでも（教師では関われない問題にも）関われるというところを挙げていた。 受験時の評価に日本語学習は入らない。日本語の問題だけで（心理的な問題はかかえているだろうが），教科の内容理解には問題のない子が大学受験時までにぐんと伸びるケースを挙げ，彼らにチャンスを与えられるようにと考えているようだ。 Over age の子には対応出来ていない。夜間中学に通う子も増えているとのこと。 学校に入り込むという形以外にも，教室を週１回開いている。（こちらは曜日が違っていたため，見学できなかった。）

（担当：濱田明子）

付記：行政と民間の協働のあり方および行政の国際相談窓口と子どもの学習支援との連携のあり方について情報を集めるため，埼玉県草加市役所の「国際相談コーナー」を視察し，NPO 法人 Living in Japan の簗瀬裕美子代表理事らと協議を行った。その後，市役所の人権共生課担当者から，草加市の外国人支援体制の現状について情報収集を行った。

③3 月 19 日「日本語のへや」視察　保育付コース　10：00～12：00
子ども　　18：00～20：00

スタッフ	正確には不明。 こども日本語学習クラブのスタッフも参加している。 市教委が採用する日本語指導員（倍率４倍）をしている人も４名いる。 大体１対２で出来るくらいの人数？ コーディネーターが必ず数名いる。
対象となる子ども	最大で 13 人。今は受験シーズンではないし，天候や行事等によっても人数は変動する。小・中学生。
その他	市の国際交流部が主催する教室。 上記の時間以外にも，春休み（４日間）・夏休み（７～８日間）には特別コースが組まれる。通常の教室と合わせると，毎日来られるようになっている。 　駅の近くにあるので，電車で 20～30 分かけてきている子もいる。市教委から学校にこの教室の事をアナウンスしてもらっている。 ※教室自体は，午後と午前に分かれており，それぞれ別々のスタッフによって運営されている。（ただし，軸となる人物は通して参加している。）それぞれ，教室の雰囲気が異なる。午前中は主婦が中心。子どもも小学校へ通う前の年齢の子がお絵かき等を通して，「子どもの世界の日本語」を学ぶというコンセプトの下学んでいる。 　夜には，熱心な母親と一緒に来た女の子（中国人？小３くらい？）が２名。そのほかにも中学生の男の子が２名，小学生の女の子がもう１名いた。高校生は大人の方の教室にいた。最後のゲームの時は，高校生や母親も参加していた。 　子どもがメインではあるが，母親ともコミュニケーションがとれるのは良いと思った。また，先輩外国人母がコーディネーターを交えて，新しく入ってきた人の相談にのるなど，意見交換の場にもなっているのが見て取れた。

（担当：濱田明子）

付記：外国人の主婦向け，児童生徒向け，成人向けの日本語教室を並行して行っている埼玉県浦和市の「日本語のへや」に参加し，対象ごとに参加しやすい教室のあり方および日本語習得支援のあり方について情報収集を行った。（谷渕真也）

2. 中部地区視察研修の記録

今回の視察は，平成 23 年 2 月 25～27 日でした。呉市あるいは東広島市を出発し，岐阜県美濃加茂市，同県可児市，愛知県名古屋市に向かいました。視察目的は，滞日外国人集住地域における外国人児童生徒支援活動を視察し，学生ボランティアの研修を行うことでした。視察研修の参加者は，伊藤美智代（ワールド・キッズ・ネットワーク），高田　純・舘野一宏・芥川　亘・古賀礼子（以上，広大・心理・院生），川上奈都希・竹内　綾・久保明日香（以上，広大・心理・学部生）の計 8 名でした。

3 泊 4 日の日程は，下表の通りです。

月日	時　　刻	内　　容	場　　所	住　　所
２月25日（金）	9:00	JR 広駅，JR 東広島駅発		
	13：27	JR 美濃太田駅着		
	14:00-15:30	のぞみ教室視察	美濃加茂市立古井小学校	美濃加茂市 本郷町 １丁目９－８
	16:00-17:15	美濃加茂市の説明		
	19:00-20:30	放課後学習支援視察	美濃加茂市中央公民館	美濃加茂市太田町３４２５－１
			上古井公民館	美濃加茂市本郷町8-8-48
		宿泊	シティーホテル美濃加茂	美濃加茂市太田町2565-1
２月26日（土）	10:00-11:00	多文化交流センター視察	多文化交流センター	美濃加茂市加茂川町１-１-１
	11:00-11:30	県多文化共生推進員研修		
	13:00～ 13:30～ 14:00～ 16:00～	NPO 法人可児市国際交流協会活動紹介 きぼう教室 仕事の日本語「サービス業で使われることば」 就学前の準備指導「ひよこ教室」 子どものポルトガル語教室「サシペレレ」 就学支援事業等視察	可児市多文化共生センターフレビア	可児市 下恵土１１９８－１
	19:30-21:00	日本語会話パートナーズ視察	美濃加茂市中央公民館	美濃加茂市太田町３４２５－１
		宿泊	シティーホテル美濃加茂	美濃加茂市太田町2565-1
２月27日（日）	10:00-12:00	多文化共生リソースセンター東海視察		名古屋市中村区松原町１－２４
	17:00	JR 広駅，JR 東広島駅着		

２月25日　「のぞみ教室」視察　14:00～14：30

スタッフ	コーディネーター　１名 日本語指導員　４名 放課後学習支援員　３名 送迎ワゴン運転手　１名 　視察時は１名のスタッフが学校と同様な一斉授業を行っており，教室の前方または後方で３名のスタッフが待機。授業内容に少しついていけていない子供や集中力が切れた子供への対応を行っていた。
対象となる子ども	19 名（ブラジル国籍，フィリピン国籍の児童が多数） 来日直後または外国人学校からの転学など，日本の学校での生活経験が少なく，日本語の理解が困難な６歳～15 歳までの外国人児童及び帰国児童。

その他	日本の学校への適応を目的としており，主な活動は①日本語指導，②教科指導(主に算数)，③学校生活への適応指導，④放課後学習の４つ。視察時は日本語学習の時間で，ものの数え方や日時の言い方の指導が行われていた。日本の学校の適応のため，学校生活に必要な日本語を教えることに重点をおいている。子供達がいる教室の内装が日本の学校の教室と同様であり，給食の配膳当番なども日本の学校と同じように行っているという。開級時間は月曜日～金曜日の８：30～16：30。子供達が日本の学校生活・ルールに慣れるよう，様々な工夫をしているのが伺えた。子供達はのびのびとリラックスしており，明るい雰囲気の教室だった。また，日本文化体験活動や地域の子供達との交流活動も行っているという。個々の子供達の状況によるが，多くの場合，子供達は３カ月～半年程度教室に在籍し，その後は日本の学校へ編入する。

２月 25 日　古井小学校「日本語教室」視察　14:35～15:30

スタッフ	日本語教室担当員　３人(常勤) 県費指導支援員　１名(非常勤) 市費指導支援員　２名(ポルトガル語１名，タガログ・英語１名，どちらも非常勤)
対象	小学校に在籍する，日本語指導が必要となる外国人児童
その他	２つの教室を日本語教室として使用。習熟度によって３クラスに分かれている。在籍学級から子供を取出し，学年や習熟度が等しい子供２～３人を日本語教室担当員１人が指導する少人数指導制。取出しは国語・社会の時間に行う。通常授業と同じ国語の教科書を用いて，日本語の基本文型(助詞など)を学んだり，音読の練習をする。同じ教科書を使用することで，子供達は皆と同じことをしているという感覚を感じたり，日本語教室での成果を通常学級で出すことで自信がつく。それらが，子供の学習意欲を高めることにつながると考えているようだ。教科学習と日本語学習をつなげた指導という印象を受けた。また，少人数制なので，個々の子供に対してきめ細かい対応ができているようだ。 取出指導だけではなく，在籍学級への入込指導も行っている。入込指導は主に算数の時間に行っており，そこで子供達の適応や日頃の成果を確認。入込指導だけの子供もいる。 日本語指導担当員によると，担当児童の日本語教室での学習内容や通常授業での学習内容，最近の様子などについて，担任と日頃から情報交換するように心がけているという。また，担任から日本語のフォローをお願いされることもあるようだ。日本語指導担当員と担任との間にしっかりとした協力・連携関係が構築され，その上で児童の学習支援が行われている印象を受けた。 在籍学級の時間割をもとに日本語教室の時間割を作成しているため，なかなか他の外国人児童と時間が合わず，個別指導が多くなってしまうことが問題点。また，最近はフィリピンから編入する児童が増加傾向にあり，タガログ語ができる指導者不足が課題となっている。

（担当：川上奈都希）

2 月 25 日(金)　美濃加茂市の多文化共生紹介　16:00～17:15

スタッフ	美濃加茂市の職員の方
その他	ここでは，美濃加茂市の職員の方から，美濃加茂市の取り組みについてのお話を伺った。 美濃加茂市では，市というよりは，ボランティア活動が積極的であるので，市はその活動をサポートする役割を担っているという。さらに，美濃加茂市では，たとえ外国人であったとしても，美濃加茂市に住んでいるのであれば市民の一人であることに何の変わりもないので，その市民の一人である外国人にどのようにサービスを行き渡らせるか，という姿勢で多文化共生の活動を展開しているという。そのような視点をもつのは非常に難しいことではあるが，言われてみれば当然であり，本当に大切なことであると感じた。現在，美濃加茂市には約 30 カ国の外国人が住んでいる。しかし，それぞれの在留目的や家族構成は異なっているため，それぞれに合ったサポートが求められるという。 市としては，コミュニケーション支援，生活支援，多文化共生の地域づくり，多文化共生推進体制の整備という大きな 4 つの柱を基に活動を行っている。さらに，市が力を入れている取り組みの一つに，「情報の伝播」が挙げられる。市が取り組んでいるこれらの活動を外国人の方に知ってもらうための情報発信を行い，相談できる場を確保することが大切だという。そのために，英語やポルトガル語によるチラシやハンドブックも作成されている。

（担当：竹内　綾）

2 月 25 日　「放課後学習支援」視察　19:00-20:30

スタッフ	日本語講師 1 名，ブラジル友の会 2 名。それに加え，ボランティアが人数不確定（大学生など）。活動を卒業した高校生がボランティアで勉強を教えることもある。 子ども 2 名，あるいは 3 名に対し，スタッフ 1 名程度の人数。日本語講師，ブラジル友の会のスタッフ 3 名は活動のほとんどに参加している。
対象となる子ども	夜の活動に中学生が 17 名(内 3 年生が 7 名)，昼の活動に小学生 15 名程度（この日の夜の活動は 14 名の参加)。 基本的には個人の宿題をすることが多く，全員高校に進学することを目的に学習を行っている。親が教育熱心で，支えられている子供も多い。中には，車で 1 時間程度かけて活動に参加しにくる子供もいる。 問題やトラブルが起こると，子供たちがスタッフの人に相談するなど，信頼関係も厚い様子。また，中学 3 年生は年に 3 回懇談をするなど，スタッフの親との関係もしっかりしている。 活動への参加は，友人同士のつながりで活動に参加するようになることが多い。
その他	関係を「先生―生徒」に限定し，高校に進学するという目標を子供たちと共有している。そのためか，子供たちは活動中に私語が少なく，集中して勉強に取り組んでいる様子が見られた。子供たちからの質問も多く，分かるまで聞くなど，積極的な様子も見られた。また，90 分の活動だが，間に 10 分の休憩をはさみ，メリハリをつけることで集中力を持続させていた。 固定の曜日以外に活動することもあるが，その場合は更なる学力向上ではなく，危ない子供に対し，活動をやめないように支援している。 活動では，高校生のスタッフが，母語で子供たちに教えている様子も見られた。さらに，仲間がいることでモチベーションがあがるという話もあり，仲間同士で支え合うというピア・サポート的な側面も強いのではないかと思われる。

（担当：芥川　亘）

平成 23 年 2 月 26 日　「多文化交流センター視察」　9:30～10:30

場所：美濃加茂多文化交流センター

渡辺マルセロさん(ブラジル友の会理事)から施設についての説明を頂く

※多文化交流センターは NPO 法人ブラジル友の会が運営

事業内容 （交流センター内に部署が設けられていた事業）	**〇定住外国人の子どもの就学支援事業(虹の架け橋「のぞみ教室」)** 期間：平成 21 年～平成 23 年 昨今の景気後退により保護者である外国人の雇用の不安定化より，公立学校に転入する児童生徒が増えたり不就学の状態にある子どもが増えたりしている。このような状況に対応し，公立学校に円滑に転入出来るようにするとともに，子どもを中心にしてブラジル人等コミュニティと地域社会の交流の促進を図る。国際移住機関(IOM)より受託 対象：美濃加茂市に在住する子ども **〇地域人材育成事業** 期間：～平成 23 年 3 月 景気後退に伴う緊急雇用創出事業として始まるが，現在は重点分野雇用創出事業に。スタッフは 9 ヶ月間，ここで働きながら，視察や研修を行う。 スタッフ：5 名

	対象：当初スタッフはブラジル人が多かったが，現在は多国籍に。 **〇定住外交人自立支援センター** 期間：平成21年7月～24年3月 岐阜県市町村ふるさと雇用再生特別基金事業費補助金の交付を受けて、地域で暮らす外国人のための生活相談や、不況下で解雇された外国人への就労支援、就業促進のための各種事業を行う。美濃加茂市からの委託事業。 スタッフ：2名 対象：岐阜県内の外国人
その他	・上記の事業の他にも，ブラジル友の会では，カラーのフリーペーパーを発行している。最初は，子ども達がデザインし，広告の依頼等も行って 3 ヶ月間発行した。それが好評であり，現在はブラジル人の元記者に記事をお願いして，1万部を発行している。内容はイベントに関することや，教育に関すること，防災に関すること，地域の外国人の子ども達に関すること(例えば，大学合格体験記など) ・今後の課題として，現在委託事業のため財源確保について，またブラジル人だけでなく多国籍に対応を目指すことを挙げていた。 ・渡辺マルセロさんの話の中で，日本社会で外国人としてやっていくためには家族に支えが大切とおっしゃっていた。学校に積極的に関わってくれたり，自分のルーツをどのように受け止めたら良いのか等について話を聞いてくれたりなど，家族の支えが大きい。 ・マルセロさんのような外国人の地域のリーダーをどう育てていけば良いでしょう?という私どもの質問に対して，マルセロさんは多文化共生の若者の合宿(日本各地に住む多国籍の若者が夏に集まって田舎で合宿を行う)に注目している。その合宿の初回に参加した多くの人が数年後に活躍しており「シンプルだけど残る。効果があるのかもしれない」。 ・古井地区多文化共生座談会のリーダーの渡辺勝則さん(美濃加茂市の多文化共生委員)にもお話を聞くことができ，日本人がもっと積極的に外国人に関わっていかないといけないとおっしゃっていました。

平成23年2月26日　「岐阜県多文化共生推進員研修会」10:30～11:30
場所：美濃加茂多文化交流センター
司会：丸山淳さん(岐阜県国際課地域国際化担当課長補佐)
研修会次第
・県の多文化共生推進施策について　10:30～11:10
・講義「これからの在住外国人の支援のあり方について」　11:10～11:30

県の多文化共生推進施策について	報告者：有田誠二(岐阜県国際課主査) **〇「県内在住外国人に関する情勢について」** ・県内の外国人登録者数は平成20年11月をピークに減少傾向。2年間で約9000人(15.4%)の減 ・公立学校の外国人児童生徒数は平成20年11月から減少傾向であったが，平成22年3月からは増加傾向。特にフィリピン国籍の児童生徒が増加傾向 ・平成21年3月以降，外国人の生活保護人員が急増。県内で外国人の数は2%

	であるのに対し，生活保護人員は7% ・外国人からは,定住傾向を反映した一定数の相談がある ・雇用，教育,生活支援の3側面の平成23年度の県の取組みが紹介された
「これからの在住外国人の支援のあり方について」	講師：渡辺マルセロ(ブラジル友の会理事) ブラジル友の会の10年間の活動を振り返って紹介された **〇ブラジル友の会の活動** ・ポルトガル語教室(2000年～) 大人はポルトガル語を使用するが,子どもたちは学校で日本語を習得していくため,家庭内で会話が出来なくなるということをうけてスタート。現在までに300人以上の子どもが受講 ・学用品賃与企画(2003年～) 美濃加茂市，NPO 法人美濃加茂国際交流協会,各公立学校と協力して実施し,無償で貸出している。貸与と一緒に学校制度の説明も行っている。 ・進路相談企画(2004年～) 日本の教育制度や学費，奨学金に関する進路ガイドの作成 ・「高く羽ばたいて」企画(2004年～) 外国人の子どもたちの親の多くは工場や弁当屋等で働いており，子どもは他の職業に触れる機会が少ない。そのため知っている職業が夢として選択されているような傾向があった。そこで，さまざまな職場にふれられるように,様々な職場(例：ソニー社,食品製造者，新聞社，空港等)へ子ども達と見学へ。 ・CAED[外国人児童・生徒放課後学習支援](2004年～) 日本の小中学校に通う外国人児童生徒対象。高校進学を目指す。支援することで子どもの可能性が広がることを実感。年々,ボランティアの数も増え,支援の質も向上している。 ・岐阜県外国人失業者支援相談窓口センター(2008年12月～2009年3月) 外国人の実態調査を実施。847世帯2303人(ブラジル人698件，フィリピン人137件，ペルー人8件，日本人4件) ・定住外国人自立支援センター(2009年～) 生活相談，就労支援，就労促進を行う。 これまでは,行政に関すること,仕事に関すること,病院に関することなど様々な情報について，外国人はすべて派遣会社任せであったが,不況により派遣会社頼みに出来なくなった。自立支援センターは各地区から情報を収集し,外国人に発信していく。また,各地区でのニーズと外国人のニーズを受けて,新しい事業を提案，実施する。 ・今後の事業について 戸別訪問やメーリングリストを使った積極的な情報発信 職業訓練と職業紹介をセットにする 外国人起業家支援センターを設立 地元特産品等の海外販路開拓
その他	・ブラジル友の会の事業での一番の成果は何ですか?という質問に対して,子どもの進学についてだとおっしゃっていました。「大人は自身で出来る部分もあるが,子どもは待てない。責任もない。友の会で一番取組みたかった部分」。 ・課題をそのままにせずに,課題に対応した事業をタイムリーに展開しているように感じました。多文化交流センターは，外国人や地域に暮らす日本人の困っていることに対応する窓口だと感じました。友の会(当事者)と行政,地域の人が有機的にリンクしていると感じました。

【渡辺マルセロさんについて】

ブラジルのリオデジャネイロで生まれ，1991年に13歳で家族と来日し，公立小学

校の 6 年生に編入。岐阜大学教育学部を卒業し，2004 年から美濃加茂市役所の通訳として勤務，2006 年から社会医療法人厚生会木沢記念病院ジブ職員。ブラジル友の会のメンバーとして活動する傍ら，行政書士の資格と取得し，2009 年に渡辺マルセロ行政書士事務所を開業。

（担当：古賀礼子）

2 月 26 日　NPO 法人可児市国際交流協会活動紹介　13：30～14：30

スタッフ	NPO 法人可児市国際交流協会のスタッフ。市民による団体で，運営はすべてボランティアが行っている。全体の人数は聞き逃したため不明だが，事務局のスタッフは 6 名。
対象	主に可児市に住む外国人。毎日 100 人程度が利用しており，2008 年 4 月開館からの累計来場者は 9 万 900 人。可児市に住む外国人はブラジル人が昔から多かったが，最近はフィリピン人が増加している。
その他	①外国人への日本語支援②情報提供③相談窓口④国際交流の場の 4 つを活動の柱としている。特に子どもの支援に力を入れており，就学前の子供から高校進学を目指す中学生の支援，高校進学者には奨学金の授与も行っている。また，外国人対象の活動だけでなく，日本人も含めた住民対象にスペイン語やポルトガル語，朝鮮語を教える講座も開かれ，国際交流の拠点になっている。建物自体は可児市のものだが，施設全体を NPO 法人可児市国際交流協会が管理しており，場所が確保されている。駅の目の前にあるので，交通のアクセスも良い。以前は公民館の一室を借りたりしていたが，毎週場所をとるのは大変だったと話していた。スタッフが常駐していることもあり，子どもたちが居場所を求めて訪れることもあるようだった。

（担当：久保明日香）

2 月 26 日　仕事の日本語「サービス業で使われる言葉」視察　14：30～15：00

スタッフ	コンビニやレストラン，ガソリンスタンドなどの店長やセールスマンなど，企業で働いている人を毎回講師に招いて，オムニバス形式で行っている。
対象	主に就職している大人。日本語で日常会話程度はこなせるが，仕事で使う日本語を学びたい人が来ている。この日は 3 名が来ていた。
その他	講義の内容は，実際に職場で使う会話や会社のシステム（階級や賃金体系など）など実践的な内容だった。

2 月 26 日　就学前の準備指導「ひよこ教室」15：00～15：30

スタッフ	1 名。小学校の授業のような感じで，小さな部屋で授業をしていた。
対象	4 名。就学前のこども。保育所に通っている子もいる。
その他	生活に使うものの名前や季節の行事などの日本の文化を教えたり，和式トイレの使い方などの学校での生活習慣を教えている。また，時間の関係で見られなかった「きぼう教室」は日本語に自信のない子ども，不就学・不登校の子ども（小学生や中学生）を対象として，日本語指導や居場所づくりを行っている。

2 月 26 日　子どものポルトガル語教室「サシペレレ」15：30～16：30

スタッフ	2 名。ブラジルで小学校教師をしていた女性が授業を行い，日本人のスタッフが補助をしている。
対象となる子ども	12 名。6 歳から 12 歳までのブラジル人の子ども。子どもたちは家でポルトガル語を話しているので会話はできるが，読み書きするのは難しいという子が多かった。通っている小学校は別々の子もおり，この教室で知り合ったりもしているようだった。
その他	授業は講義形式で，教師役のスタッフがホワイトボードにポルトガル語の単語を書き，読み方を教え，それを子どもたちがノート書き取るという流れであった。授業はポルトガル語のみで行われていた。教科書は現在注文中のためこの日はコピーであったが，ブラジルの小学校で使われているものと同じものを使っている。 受講している子どもの年齢に幅があるので，就学したての子は内容がよくわからず座っているという状態も見られたが，ほとんどの子どもはやや難しいと言いながらも理解しているようだった。

2 月 26 日　「MINOKAMO 日本語会話パートナーズ」視察　19:30～21:00

スタッフ	正確には不明(会員 12 名とボランティアスタッフ) この日は 6 名の受講者に対し 6 名のスタッフが 1 対 1 の対応をしており，他に 2 名のスタッフが各組の様子を見て回っていた。また，ボランティアスタッフ(日本語会話パートナー)は随時募集を行っている。
対象	1 年を 3 学期に分け，1 学期 30 名まで。原則として 18 歳以上の人を対象としている。 この日は 6 名の受講者が参加していた。それぞれで日本語の習得レベルは異なっており，助詞の使い方を学習する人から，日本語能力試験を受けるための学習をする人までおり，それぞれの受講者に担当のスタッフがついて，受講者のニーズに合った支援を行っていた。
その他	少人数のグループ制での支援を行っており，受講者各々のニーズに合った学習支援を行っている。 どのように支援を行うかは受講者のニーズとスタッフのアイディア次第で決まり，日本語で雑談をするというグループもあれば，スタッフが教材を用意し

	てくるグループもある。 　以前は多人数制の講座でも対応できたが，定住化する外国人が増えたことで日本語の習得レベルのバラつきが大きくなり，ニーズも多様化してきたことから，現在の少人数制に移行したとのこと。 　1学期10回の間，基本的には1人の受講者には同じスタッフが担当するので，受講者とスタッフの関係が深まりやすく，受講者も細かなニーズをスタッフに伝えやすい雰囲気になっていると感じた。 　毎週10回全て参加することは勤務形態（夜勤など）や天候により難しく，ボランティアスタッフにとっても同じようである。そのため，基本的には毎週土曜日となっているが，マンツーマン体制では，受講者とスタッフがお互いに都合のよい時間，場所で行ってもよいことになっている。

（担当：舘野一宏）

2月27日　「多文化共生リソースセンター東海」視察　10:00～12：00

スタッフ	ＮＰＯ法人。常勤２名，非常勤約16名
対象となる子ども	子どもへの直接支援は行っていない
その他	名古屋市のほぼ中心部に位置し，他団体と知恵を出し合って活動している。活動は中間支援が中心であり，現場をもたない。団体数が多いが団体同士が繋がりを持てない現状から立ち上がった組織であり，ネットワークや情報共有機能が中心である。 　主な活動としては，①多文化共生の理解促進，②社会参画とエンパワメント，③ネットワーク作り，④サポーター同士の交流があげられた。②の例として，外国人が孤立した実態から，市職員（地域担当課）と国際交流協会が中心となり，参加し社会人基礎力養成講座を開催している。講座の目的としては，誰もが国籍関わらず得られる権利として，本人の力が発揮できるようにエンパワメントを行っていくことであった。年齢は中１～22歳ぐらいの子まで，日本人を含む約15人程度毎回（全４回）参加した。観光や医療など現場に行き発表することで，交流やいろんな仕事を見て親以外の職種にも体験を広げていく経験になっている。課題としては，礼拝など曜日設定が難しく，全ての回に出られない子が多いという点であった。
	③の例として，外国人コミュニティフェアというイベントについて紹介された。２部構成からなり，午前の部は非公開で外国人コミュニティ同士が情報交換や意見交換など繋がりを作るのが目的。特に，家での言葉の問題などニューカマーとオールドカマーの課題の乗り越え方などが共有されている。また，ボランティアの集め方，助成金の申請方法，イベント周知の方法についても共有している。午後の部は広く市民に公開し，一般市民と交流している。④については，サポートしている人を集めて意見公開できる場を設定している。中心である名古屋で開催されても，地方に戻るとバラバラになることから，地域で開催することで，現地での相談できる相手をつくっていくことを目的としている。 　また，自治体と地域での実態調査を行っている。その際，外国人が集まりやすい店を中心に母語の話せる外国人スタッフに依頼し調査した。その結果，集住地域では問題が浮き彫りになりやすいが，散在している地域では，問題の在りかもわかりにくいという実態が明らかになっている。

	活動の課題として，間接支援の難しさがあげられていた。現場をもたないため実感をもてず，ボランティアを紹介することで逆にニーズに合わず迷惑になることがある。また，外部者であるという難しさがある。特に，地域と一緒にイベントを開催する際に，行政の担当者に連絡するところからはじめるため，動きにくく粘り強い交渉が毎回必要。さらに，資金は行政の委託事業の面が多く、事業予算が出なくなったときにスタッフの雇用の継続が難しく，自主事業を展開していく必要性を感じているようであった。

（担当：高田　純）

【付添者としての感想】　伊藤美智代

今回の視察は，フルコースでした。外国人住民についての様々な角度からの支援を一通り見学させてもらい，充実した視察になりました。ありがとうございました。

私は日ごろから関わっている世界ですし，各地に知り合いがいましたから何ということはありませんでしたが，学生達は脳から火を吹いて疲れただろうと思います。ちょっとした異文化体験だったでしょう。

彼らの研究に直接は結びつかないのでしょうが，世の中を肌でしっかり感じとってくれたと思います。

私は帰りに四日市に寄って，呉から移り住んだ姻戚関係にある４家族に会いました。広地域の中学校を卒業した３人が，３人・２人・２人の子持ちで素敵なパパやママになっていました。子どもの頃を懐かしみ，もっと勉強しとけばよかったと口々に言っていました。

今関わっている子ども達が，がんばりたい気持を素直に出せる子どもであってほしいです。

第３節　ボランティア養成研修会

スタッフや学生ボランティアの資質向上のために，3 回研修会を行いました。以下は，その研修の参加した学生たちの感想です。どのような研修がなされたかよりも，学生ボランティアがどんな感想を抱いたかに絞って，報告します。

1. フォトストーリー・ワークショップ（ＰＳＷ，計２回）

このＰＳＷでは，参加者が外国人と日本人が 2 人 1 組となり，自分の写真を持ち寄り，コンピュータに取り込み，与えられたテーマに沿って自分なりのストーリー台本を作成し，写真を並べ，アフレコで音声を吹き込み，ひとつのムービー作品をつくりあげ，参加者のまえで上映するというかなり手の込んだ作業をしました。詳細は，名古屋国際センター「外国にルーツを持つ子ども支援プロジェクト～わたしのフォトストーリー～報告書」を参照してください。日時は，平成 21 年 10 月 11 日 10 時～15 時と 11 月 28 日 10 時～15 時で，会場は，くれ市民協働センターでした。講師は，愛知淑徳大学講師の小島祥美先生でした。参加者は，学生ボランティアと外国人の子どもたち計 15 名でした。

【参加学生の感想】

（文中の固有名詞は，本節限りの匿名にしています。）

学生Ａ

◎フォトストーリーについて
・パソコンの操作や，録音など難しい作業がたくさんあり，準備がなかなか大変でしたが，上映会はとても楽しかったです。
・フォトストーリーにすることによって，日常生活ではなかなか話すことのない内容（自己開示できなかったり，する機会のない部分）を見たり伝えたりできて，とてもいい経験になったと思います。
・個人的に，Ｙちゃんがしっかりと取り組んでくれたことが，とても嬉しかったです。一回目のフォトストーリーではあまりやりたくなさそうでしたが，ナレーションを考えるときも，録音の前の練習もとても真剣に取り組んでいたので，驚きましたが，よかったなと思いました。
・とても楽しい活動でしたが，準備の大変さから，頻繁にはできない活動ではないかなと感じました。

学生Ｂ
　今回のフォトストーリーはＳにかかりきりだった。準備したものがほぼ白紙になった状態からのスタートだったが，前回のストーリーを踏まえつつ，写真に合わせて素敵なストーリーができた。話を考えながら写真を選び，ナレーションを考えて書き，読みにくかった所を振り返りながら読みやすいように改良して，5，6回練習をしてから録音に臨んだ。ひとつひとつの工程にＳ自身が素直に一生懸命取り組み，頑張ったことが形になるというとてもいい経験になったと思う。帰国してしまうのは非常に残念だが，最後の活動でいい交流が出来た。また，Ｓと一緒に取り組む中で，日本語教育の一環としての意義も大きいと思った。ただ学ぶために字を書くのではなく，自分で読むために文章を推敲し，読み方を工夫し，自己表現のツールとして言葉を用いる体験になっていた。僕自身も，文節の区切りや句読点の意味などを含めてＳと日本語を勉強した印象だった。
　活動全体では，Ｙを始め，他のブラジル人の子ども達にとっても，新しい自分や他者との出会いの場になっていて，よいと思った。特にＹは厳しい親子関係や弟との葛藤の時期を乗り越えた上での作品で，感動的だった。それは学生にとっても同様で，特にＫ君は，勇気ある作品を完成させて，素直な彼らしかった。
　家族をテーマにした作品が多かったのも印象的だった。みんなが家族の理想の形のひとつとして自分の家族を取り上げていて，ブラジル人の家族関係の大切さを実感した。

【主催者の感想】
　アフレコなどの作業は，私には気の遠くなるような作業でしたが，学生の皆さんはしっかり対応しており，感心しました。
　Ｃ君やＳちゃんがとても生き生きと取り組んでいたのを見て，子どもたちにとってとても良い自己表現の方法なのだなと思いました。どうして小島先生がこんなむずかしいＷＳを指導するのだろうと思っていましたが，Windows は母語を超える共通のツールだから使いこなそう，という明確な姿勢を感じました。（ＫＫ）

2. ボランティア養成研修会
　この研修会は，「外国にルーツを持つ子ども達の支援活動」をテーマに開催されました。チラシには，「呉市の外国人登録者数は約 3100 人，5～14 歳の年齢は 153 人です。その内の 86 人が市内の小中学校に在籍しています。この中には日本語の高い壁の前でたじろぎ，学校文化の違いに戸惑い，言いようのない孤立感を感じている子どもがたくさんいます。

こうした子ども達の支援活動を行う上で，子ども達や活動の背景と実状を知りその思いを聴くことがとても重要です。より適切で有意義なサポートをするために，次の通り研修会を開きます。」と開催趣旨が書かれていました。日時は，平成22年10月10日10時～15時，場所は，くれ市民協働センター，講師は，伊藤美智代先生，谷渕真也先生でした。参加者は，学生ボランティアなど17名。それに，ゲストの外国人の子ども4名でした。

【主催者の感想】

日曜日10時～15時，広公民館市民協働センターで，アミサージ，シランダ＆ピアサポート教室のボランティア養成研修会が開催されました。

講師は，伊藤美智代さん，谷渕真也さん。受講生は，比治山大学の学生8名，広大の学生5名，東広島市日本語教育サークル「やっちゃる」2名，ワールドキッズネットワーク2名。研修内容は，10時～12時　講義，13時～15時　ゲストを囲んでのワークショップでした。

広大ボランティア2代目リーダーの谷渕君の教え子たち8人が参加したのは，ドリカム的でした。ボランティア学生が大学教員になり，教え子をボランティア候補として連れてくるなんて，夢には見てたけど，まさかそれが実現するなんて驚きです。これは夢では，と何度も自分をつねってみたものです。できれば，今回受講してくれた学生諸君のなかから，土曜日の午後に広に通ってくれる人が一人でも多く出てくれるとうれしいですね。

「（大学と違って）楽しそうな谷渕先生」を見た教え子たちは，ここが特別な場だと感じたことでしょう。

「やっちゃる」のお二人は，自分たちの課題をこれからどう実現するかという目的意識をしっかり持って受講されており，研修を通していくつも答えを見つけていかれました。こちらは，まさに大人の職業人の受講生でした。東広島の地にこんなに意欲的な仲間がいることは，伊藤さんにとって心強いだろうなと思いました。

広大とWKNの受講生は，今回はどちらかといえば比治山の学生さんや東広島の方々の研修を手伝う面があったと思いますが，伊藤さんのまとまった講義，ゲストの刺激的な話など，新たな収穫があったと思います。比治山の若い学生と比べると，広大の皆さんが妙に大人に見えましたね。

対人支援のボランティア研修で，対象である当事者から直接話を聞くことはもっとも効果的な方法です。通常は，スピーカーとして訓練を受けた当事者一人から話を聞くことが多いですが，今回は4名ものゲストに恵まれました。これもピアサポート教室やシランダが長く続いていることの成果の１つだと思います。また，Ｐ，Ａ，Ｃという逸材に恵まれていることも感謝したいと思います。年上の3人に比べると，15歳のＳには荷が重かったかなと思いました。でも，1時間のインタビューにけなげに笑顔で答えてくれていましたし，彼女にも他人の役に立つという経験ができてよかったと思いました。ちなみに，ＰとＡが以前と変わらず仲よさそうで安心しました。

いつものように研修内容や方法は伊藤さんまかせでしたが，研修経験豊富な伊藤さんらしく，さまざまな工夫がなされていました。講義も一方的なお話ではなく，受講生に問題を投げかけ，自己発見を促すことが多かったです。しかも，受講生の緊張を和らげ，受講生同士の交流を促す小集団学習でした。講義の導入で，「あなたが外国にルーツを持つ子どもだったら，どんな体験をするでしょう」という問いかけが繰返されていたのは，私たちの臨床心理学の学習法と同じだと思いました。しかも，「周りがこういう態度をとると，自分が自分を受け入れられなくなり，自分が自分をきらいになる」といったあたりは，まさに心理学そのものでした。講義の後半に，こんな活動もしていると伊藤さんの幅広い

活動が次々と紹介されましたが，少なくとも東広島の二人には，超刺激的だったと思います。
　突然講義を振られた谷渕君も，かつて自分でつくったスライドだけに，きちんと対応していました。あのスライドは，ブラジル人向けだけど，日本人向けにも使えるいいスライドでした。
　３代目リーダーの高田君が，11 月 3 日に，東広島の地域ボランティアの講演会（子育て支援の NPO 主催）で，ピア・サポート教室の話をしますが，今回のスライドのファイルを拝借できればありがたいと思いました。（ＫＫ）

【講師の感想】
　10日の研修会，比治山の受講生たちは，最初戸惑っていたようですが，大学とは全く違う雰囲気に触れて，大いに刺激を受けたと思います。参加者に考えさせるように構成されていて，そのあとに当事者の話を聞くということで，自分にできることなど，頭をフル回転させて考えていたようでした。
　授業でも呉の活動の話をしており，その実際に触れて，何か得てくれたと思います。学生たちの感想が楽しみです。
　僕自身は，比治山の教員として参加し，広大生の様子を見ている余裕がなく，広大院生として参加していた時とはずいぶん視点が変わるなぁと考えていました。そういう意味では，高田君がしっかり広大側をサポートしてくれているのがずいぶん助かりました。
　ちょうどゲストと学生は同じ年齢でした。参加した皆さんが感じられたように，エネルギーが有り余っている若者たちなので，活動に参加して，いい方向に向かってくれればなと期待しています。
　学生に，「谷渕先生楽しそう」と言われたのは，大学ではそんなに疲れた表情をしているんだなぁと反省しました。逆に言うと，活動の中の「活力」みたいなのを感じてもらえたかな。（ＳＴ）

【参加学生の感想】
学生Ｔ
　まず，午前中のタイ語やハングルを読んでみて，分からない言語を読むことがこんなにも苦痛なものかと感じました。また，ポルトガル語での算数の文章題については，言葉も分かっていないのに無理だと絶望しました。しかし，外国人の子供たちは常にこのような体験をしているのだと知り，改めて日本語で勉強することの難しさを実感しました。
　後半のグループワークでは，Ｐの生の体験を聞かせてもらいました。Ｐをはじめ外国の子たちが日本で困ったことについてや困難を乗り越える際に支えになったことを聞くことができ，外国人の子を支える際の具体的な手段について考えることができました。抱える困難としては，やはり，全体的に言葉の壁が大きいのかなと感じました。スタッフに対して望むこととしては，1人1人に合った対応を心掛けることや，遊びの中に勉強をこっそり取り入れるといった点が挙げられていました。また，今後の活動についてグループで話し合った結果，スタッフ，こども，学校側それぞれ考えや想いがあるのではないかということから，本音で語ることのできる会議を開催できればいいのではないかという意見が出ました。確かに，実際に本人の声を聞く機会があれば，より分かりあうことができるのではないかと思います。
　今年のシランダは受験生が３名いますが，ＳとＮはあまり勉強する気が起らないようです。私は何度かＳに勉強をさせようと試みましたが，やんわりと断られて，どう対応する

か迷っていたのですが，今回の研修会を通じて，まず，進路や勉強についての話ができる関係になってから，じっくり悩みや不安を聞いた後に勉強させていきたいなと感じました。また，より子供たちの話にしっかりと耳を傾けて，支えていこうと思いました。

3. ボランティアの「やさしい日本語」研修会

本研修会「学習支援活動におけるやさしい日本語」は，学生ボランティアたちの希望で開催されました。チラシには，「日本語を母語としない子どもや，異文化の中で暮らす子どもにとって，学習言語の習得はとても難しいものです。こうした子ども達と活動する時，分かりやすく話し，質問しやすい態度をとることが重要です。教科学習支援における「やさしい日本語」について，次の通り研修会を開きます」とありましたが，シランダやピア・サポート教室での日々の活動で自分たちの使う言葉を考え直す機会としたかったようです。日時は，平成 23 年 3 月 8 日 16 時～18 時 30 分，場所は，広島大学教育学部Ａ６１７教室，講師は，黒田　類先生（ひろしま国際センター）でした。参加者は，ボランティア学生など 9 名でした。講義の内容は，すぐに役立つことが多く，学生たちはとても喜んでいました。黒田先生は，広大東広島キャンパスのすぐ近くの「ひろいま国際プラザ」にお勤めで，これからもお世話になります。

第３章　支援者ネットワークの再構築に関する研究（研究２）

第１節　呉市帰国・外国人児童生徒教育連絡会

1. 平成 21 年度の連絡会実施状況

平成 21 年度には，連絡会は 2 回開催されました。第 1 回目には，詳細な記録が残されていますので，連絡会の様子をくわしくしることができます。

①第 1 回 6 月 29 日

この回の参加者は，下表の通りでした。

＜ 会　員 ＞

白岳小学校	校長	竹越　哲夫
	日本語指導学級担当教諭	河端　雅子
	国際教育担当教諭	小松　和子
広小学校	日本語指導学級担当教諭	山本　利栄
横路小学校	日本語指導学級担当教諭	片山　智由利
広島大学大学院教育学研究科心理学講座教授		兒玉　憲一
広島大学大学院教育学研究科博士課程後期		谷渕　真也
呉市教育委員会	学校教育課	小竹　術
	文化振興課	濱田　俊文
呉市国際交流広場		秦　和久
市民部　人権センター		山下　武治
白岳小学校　ＰＴＡ会長		清水　利憲
ひまわり２１		堀　郁恵
ワールド・キッズ・ネットワーク		伊藤　美智代

会議の内容は，自己紹介，今年度の取り組み，意見交換の 3 部構成でした。

自己紹介は，こんな感じでした。

竹越会長：昨年度までの活動で，学校・行政・NPO・保護者・子どもたちの連携がとれるようになった。保護者には学校や行政が自分たちのことをしっかりと考えてくれているという

メッセージは送れた。彼らの期待は裏切れない。アイデンティティ・教科学習など様々な点において気の長い取り組みではあるけれど，継続していくことが重要である。

河端：今年度は21名の外国籍児童が在籍。今年転勤してきて，初めて日本語指導学級の担任になった。個々に課題があるが，楽しみながら取り組んでいる。みなさんといっしょに取り組んでいけたらと思う。

小松：国際教育担当。今年度はペルーとブラジル籍の児童が担任しているクラスに在籍。学級の中で仲間と一緒にどう学力をつけ，どう育てていくかが今年度の課題です。

小竹：一昨年昨年と続いた文科省との流れは切れたが，国際理解教育・外国人児童生徒の担当として，この連絡会の調整・連絡等で協力していく。

小池：今年度から文化振興課の日本語教室担当。

山下：外国人の人権啓発も進めていけたらと思っています。

伊藤：ワールド・キッズ・ネットワーク代表。外国にルーツをもつ子どもたちの支援をしています。今年度は毎週土曜日のシランダと毎週火曜日のアミザージを運営。

堀：ひまわり２１代表。地域日本語を活動の中心に，日本語教室《呉》の運営などをしている。

ゲスト

大隅：NHK 広島のディレクター。福祉や教育を取材テーマに，海田町を取材するなかで，呉に取材に来ています。小島先生から呉方式(外国籍の子どもたちが集住していない，分散地区での取り組み)を聞き，呉方式を伝えることで，「自分の学校でもやってみようかな」と思えるような番組が作れたらと思っている。

次に，後述するような会則が出席者から了承されました。なお，今年度役員は以下の通りです。会長は竹越，副会長は兒玉，コーディネーターは伊藤，企画委員は竹越，兒玉，伊藤，小竹は助言担当となりました。

次に，今年度の取り組みは，次のような予定です。

連絡会：一学期に一回開催

放課後クラブスタッフ会議：週一回(大谷・後藤・堀)

スタッフ会議：７月１１日(土)１６時半～，市民協働センター(ピアサポート・シランダ・放課後クラブ合同会議)

シランダ：毎週土曜日14時～16時，市民協働センター。現在，４・５人の子ども(韓国・中国・ペルー・ブラジル)が参加。確実に居場所として定着。スタッフは広大生，ブラジル人ママ，ブラジル人の高校生が参加。

ピアサポート教室：シランダと共同。心理学専攻の広大生で，客観的にサポート。

放課後クラブ：白岳小学校で毎週火曜日１５時～１７時に実施。

保護者会：7月18日（土）19時～21時，19日（火）14時～16時のどちらかに開催。白岳小の保護者にどちらなら参加できる。

白岳っ子フェスティバル：10月31日開催予定。昨年度のような保護者と一緒になった取組にしたい。

じゃがちゃんまつり：7月5日(日)広会館。白岳小の保護者もブラジルのリングイッサを焼き地域の人々に提供します。

日本語指導教室担当者対象の研修会；6月30日。それぞれの課題や要望などを話し合う予定。

最後に，意見交換があり，竹越会長より以下のような閉会の挨拶がありました。

センター校と近隣の学校との意識の違いは確かにあるが，センター校として得た知識やノウハウを広めていくことが課題である。日本語指導教室，母学級，放課後クラブだけではなく，NPOやボランティアの方々が積極的に動いてくださることが有り難く，学校側がもっと門戸を開けていければ，もっと様々な取り組みができるのではないかと思う。日本は明らかに

少子高齢化が進んでいる中で，外国人労働者に頼らざるをえない現状で，彼らのためにどんな教育や福祉を提供することができるのか，校長ということだけではなく，一人の日本人として使命感をもって取り組んでいかなくてはと思う。ブラジルで育てば，その子の能力がもっと発揮できたかもしれない。だからこそ，日本でも何か少しでも能力を伸ばしていってほしい。異文化の中で何とか子どもたちは頑張っていて，そんな子供たちと真剣に向き合うということは日本の子どもたちとも真剣に向き合うということである。組織とネットワークを信じて，どれだけやれるか。カラ元気でもいいから元気を出して，今年度も一緒に取り組んでいきましょう。

外国人児童生徒教育連絡会　会則

（目的）

第１条

　呉市帰国・外国人児童生徒教育連絡会（以下「連絡会」とする。）は，呉市における帰国・外国人児童生徒の教育を推進するための活動を企画立案し，関係機関・団体との協力のもとに実施する。

（活動）

第２条

　連絡会は次の活動を実施する。

（１）　児童生徒への日本語指導・適応指導の充実を図るための活動。

（２）　保護者の理解・協力を喚起するための活動。

（３）　関係機関及び団体との連携。

（４）　その他，この会の目的を達するために必要なこと。

（会員）

第３条

　連絡会は別表にあげる者をもって構成し，新たに加入を希望する場合は，連絡会の承認を得るものとする。

（役員）

第４条

　連絡会に次の役員を置く。任期は１年とし，再任を妨げない。

（１）　会長

（２）　副会長

（３）　コーディネーター

（４）　企画委員

２　会長は会員の互選とし，副会長，コーディネーター，企画委員は会長が指名する。

３　会長は連絡会を代表し，会務を統括する。

４　副会長は会長を補佐し，会長に事故があるときはその職務を代行する。

５　コーディネーターは企画委員会を開催し，連絡会の企画，立案，運営を行う。

６　企画委員は企画委員会に参加し，連絡会の企画，立案にあたる。

（会議）

第５条

　連絡会の会議は，必要に応じて会長が招集し会長が議長となる。また，会長が必要と認めた時は，会員以外の者を出席させ説明や意見を聴くことができる。

付則　この会則は平成２１

②第 2 回　3 月 26 日　広公民館

【開催報告】広島大学　兒玉憲一

参加者は，白岳小の竹越校長先生，河端先生，シランダの伊藤さん，堀さん，大学から舘野君，私でした。参加者がそれぞれの活動報告をしました。

白岳小では，帰国した子どもたちと同じくらいの子どもがやってきて，外国の子どもたちの数は減っていないそうです。子どもたちの抱える問題は多様化しているそうです。教員の３分の１が今春の異動で入れ替わるので，また研修が必要です。来年度１年間，カナダトロント大学大学院に留学している日本人男性が研修に来るそうです。

シランダは，最近中学生が増えたので，高校受験をめざした教科学習にも力を入れようとしています。アミサージでも，上級生は勉強をします。ですから，いずれでも個別指導するためにボランティアを増やす必要があります。

広島大学の発展研究の中間報告は，添付ファイルの通りです。先日の ML で，濱田さんが報告してくれた「埼玉視察」について，伊藤さんが詳しく報告してくれました。埼玉県では，外国の子どもたちでも学習意欲が高くほぼ全員が高校や大学に進学に進学するので，学生ボランティアが学習支援にたくさん参加しているそうです。

来年度の課題としては，シランダもアミサージもボランティアを増やすこと，本年度好評だった日本教育の講演会研修会をまた白岳小などで開催すること，ボランティアスタッフのための研修会を行うこと，それに，もし中川郷子先生が来日されるならば，ぜひ呉で講演してもらうことなどが話し合われました。

年度末で，参加者は少なかったですが，大切なことが話せてよかったと思います。

2. 平成 22 年度の実施状況

連絡会は，第 1 回 5 月 15 日，第 2 回 9 月 30 日，第 3 回 3 月 29 日の計 3 回開催されました。とくに，第 3 回では，本節の冒頭の写真のように開催され，22 年度のさまざまな活動報告が行われました。

第２節　呉市ブラジル人児童生徒の保護者会

1. 平成 21 年度の保護者会実施状況

第 1 回の保護者会は，平成 21 年 7 月 18 日，第 2 回は平成 21 年 10 月 10 日，第 3 回は平成 22 年 3 月 26 日に開催されました。以下に，第 3 回に関する主催者サイドの報告を紹介します。

【開催報告】

■ブラジル人の参加は，4 校 5 家族，23 人。今回は学校生活の DVD（ポル語版）を見ながら話

を進めたのですが，気楽にいろんなことが話せたと思います。日曜の午後ということもあって，のんびりしたいい会になりました。（ＭＩ）
■今回は，Ｐさんがお休みだったので，Ｂさんが通訳をしてくれました。かつてオークアリーナのピア・サポート教室に通っていた彼女がしっかり者に成長し，一生懸命通訳してくれてうれしかったです。
　前半は，伊藤さんが今年の活動をスライドで紹介し，来年度のイベントへの参加を呼びかけました。
　後半は，小学校へのガイダンス DVD のポルトガル語版を見ながら，保護者の質問に竹越校長先生が答えるものでした。日本文化の縮図のような小学校のきまりへのブラジル人の疑問，たとえば，「なぜ毎日教科書を持って帰るの」，「冬でもなぜ体操服は短いの」など保護者が質問し，竹越先生が当意即妙な答えをされるのが面白かったです。ちなみに，後者の質問に対する答えは，子どもは「風の子」だから，だそうです。通訳できたかな。
　今回は，工場に日曜出勤のため参加できなかった保護者もいたそうで，景気が少し回復しているのかなという印象も持ちました。連絡会も保護者会も，とても大切だし，すごく面白いので，細く長く続けていきましょう。（ＫＫ）

2. 平成 22 年度保護者会の実施状況
　保護者会は，3 回開催されましたが，そのうち第 1 回と第 2 回の様子を，主催者サイドの報告と参加者の感想文で紹介します。
①第 1 回保護者会開催報告
　【主催者報告】7 月 17 日（土）19：00～20：30，広公民館 503 において，今年度第 1 回の保護者会を開きました。シランダとアミザージの経過報告と竹越校長先生からのお話でした。
　今回のテーマは，「イキイキ頑張っている子どもたちを見てもらう」でした。保護者の皆さんは，外での子どもの姿を見ることがありません。この保護者会は，子どもの様子が分かるいい機会になっているようです。
　最後に，スタッフ以外の全員から感想を言ってもらいましたが，「安心」と「感謝」を皆さんがおっしゃっていたのが，とても印象的でした。
　「ピコレ」を届けてくださった，ブラジルの中川先生ですが，秋に来日されるかもしれないそうです。もし実現したら，広島に来てくださるそうですよ。（ＭＩ）

②第 2 回保護者会開催報告
　【主催者報告】昨日の保護者会は，ブラジル人家族40名，日本人関係者12人が集まりました。ほとんどポルトガル語で進める会でした。活発なやり取りが進みとてもいい雰囲気でした。内容については，Ｍさんに記録してもらいました。そのうち，翻訳したものが送られてくることになっています。1年に1回は，ポルトガル語で進める会にすればいいなあと思います。来年は，神戸で自助グループ「関西ブラジル人コミュニティー」を運営している方に来てもらいたいなあ，なんて考えながら見ていました。Ｐさん，Ｂさん，Ａ君が，私達の為に通訳してくれました。Ｋさんは廊下で子ども達の世話をしてくれました。お父さんたちが時々子ども達の様子を見てくれていました。子ども達が成長しているし，みんながこの活動を大切にしてくれていると感じて，とてもうれしかったです。（ＭＩ）
【参加者感想】11 月 6 日の広公民館でのブラジル人保護者会で学んだことを述べてみます。保護者の出足がいつもより早く，かつ多く集まりました（伊藤さんによるとブラジル人 40 名だそうです）。やはり，ブラジルで実際にカウンセリングをしている同国人の中川先生の話が聞けるというのは魅力的だったのでしょう。ブラジル時間も企画の内容によるのだということです。
　中川先生の講演は，Ｐさんの通訳から，4日夜の広大講演とほぼ同じということがわかりま

した。その後の質疑では，ブラジル人の母親たちがとても生き生きと中川先生に質問し，中川先生の話を真剣に聞いていることがとても印象的でした。通訳のＰさんやＢさんも，そうしたやりとりを聞き漏らさないように真剣に聞いており，むしろ通訳する時間も惜しむようでした。講師が聞きたい話を母国語で話してくれるとなると，こうも保護者たちの表情が生き生きとし，喜びにあふれてくるのかと思いました。そこで，私も保護者会の今後のあり方を考えさせられました。サンパウロとまでいかなくても，滞日のブラジル人をもっと呼んだほうがいいですね。
（通訳によると）中川先生が保護者に強調されていたのは，日本でも帰国後も，親は子どもとしっかりコミュニケーションをとる努力が必要ということでした。異文化への適応，母国文化への再適応はいずれも子どもにとってはきわめて困難なことで，それだけにずっと母国にいる親子よりも親子関係が大切であることを相当自覚しなければならないということを実例をあげて繰り返し話されていました。保護者の多くは，身の引き締まる思いだったのではないでしょうか。でも，親が変われば子も変わるということで，希望が持てますよね。
　ところで，中川先生は，日本の教育現場で「発達障害」の診断が乱発され，なかには抗精神病薬が長期投与されていることに怒りを隠していませんでした。この点は，私も同感です。子どもたちの行動をもっと心理社会的に，しかも長期的な視点で理解する努力が教師やカウンセラーに求められています。とりわけ異文化の中の子どもたちを性急に生物学的に診断することには批判的である必要があります。
　広大の講演の後，心理学者中川先生からは，子どもたちの心理アセスメント方法について私たちと共同研究しようという提案もありました。質問紙法には限界があるので，日本にいる外国語の子に描画法や投影法などを実施し，日本の子どもの比較をしたらどうでしょう。また，保護者会の前後で，本学心理臨床センターに子どもを紹介したいという話もありました。ただし，当センターのケースにするとお金もかかるので，研究ベースで，土日にプレイなどをすることも考えていいと思います。（ＫＫ）

第３節　教師対象の研修会

　この 2 年間に，連絡会よ本研究プロジェクトの共催で，外国人児童生徒の通う小・中学校の教師対象に計 4 回の研修会を開催しました。

①小島祥美先生講演会

テーマ　将来に夢と希望を！　～外国人児童生徒の教育～
日時　平成 21 年 11 月 27 日（金）15:00～17:00
場所　白岳小学校　図書室
講師　愛知淑徳大学　コミュニティ・コラボレーションセンター
　　専任講師小島　祥美先生
参加者　40 名

　※参加した教師の感想は，本研究プロジェクトには届いていませんので，開催要領のみを紹介します。

②坪内好子先生講演会

テ ー マ　日本で学習する外国からの子どもたち
日時　平成２１年１２月６日（日）１３時～１５時
会場　広島大学大学院教育学研究科　Ａ棟 6 階（東端）Ａ６１７教室
　　（東広島キャンパス）
　　大阪市立阿倍野中学校（帰国した子どもの教育センター校）
　　日本語・適応指導担当教諭
参加者　学生・教員・市民 45 名

講師　　坪内　好子先生

【主催者の感想】

・坪内先生のお話はとても刺激的でした。活動を進めていくうえでのヒントをたくさんいただきました。終了後お話ししていた時に，「広島県人は従順ですね。」と言われました。大阪人はダメもとでガンガン主張するそうです。なるほどそうかもしれません。私は，時間をかけて「しなやか・したたか・しぶとく」でいこうと思っています。決して従順なわけではないので，その内「こうだったらいいのになあ」が具現化するだろうと思います。たまたま，昨年度の講師松尾先生がいらしていて，講座に参加した学生に一目会いたいと言われたのでお連れしました。結局そのまま講演会に参加してくださって，「たくさんの情報と親切と熱意をいただいた」と喜んでおられました。たくさんの学生が真剣に聞いていた姿に，意を強くもたれたようでした。先生はご自身も埼玉県で「子ども日本語学習クラブ」というボランティア活動をされています。日本語の専門家ですが，私達の仲間でもあります。同じような思いを持って活動している人が，日本のあちこちにいるのです。皆さんが働きかけてくださったおかげですね，参加者が思いのほか多かったです。「東広島で夏休め教室を開きたい」という相談がありましたし，活動に参加したいという学生達もいました。今日蒔かれた種が実を結ぶ事もあるかもしれません。楽しみです。今回，東広島の先生方や意欲的な関係機関の方がつながることができました。とにかく，心通じる人達で団体を作るように勧めました。やる気いっぱいの方達がいますので，なんとかなるかもしれません。実現すれば，呉とは違う立ちあがり方で興味深いです。（ＭＩ）

この研修会は，東広島市の講演も得たので，下記のような報告書を提出しましたので，ご参考までに紹介します。

【後援先報告書】

東広島市長　蔵田　義雄　様

住所　　東広島市鏡山１－１－１
広島大学大学院教育学研究科
団体名　広島大学地域貢献発展研究プロジェクト
代表者氏名　兒玉　憲一

平成２１年１１月１０日付け東広企第２２号で承諾のあった後援名義の使用について，次のように実施しましたので報告します。

１　事業の名称　講演会「日本で学習する外国からの子どもたち」
２　開催日時　平成 ２１年１２月 ６日（日）13：00 ～ 15：00
３　場所　東広島市鏡山１－１－１ 広島大学大学院教育学研究科　Ａ６１７教室
４　概要及び成果など

講師は，大阪阿倍野中学校教諭（日本語・適応指導担当）坪内好子先生。参加者は，東広島市，呉市，海田地区等の日本語教育担当の教員，国際交流担当職員，民間団体スタッフ，大学教員，学生計４５名。

講演の前半では，大阪市の「帰国した子どもの教育センター」校におけるさまざまな国から来た子どもへの日本語教育，適応指導，母語支援，進路保障，さらには多文化共生の取り組みがＤＶＤも用いながら紹介された。講演の後半では，参加者が６班に分かれ，小グループ討議を行い，話し合った結果を全体でシェアした。最後の全体討議では，参加者から大阪市の先進的な取組みが可能になった背景に質問が相次いだ。講師からは，直接子どもたちに接している担当教諭たちが，校長や教育委員会に粘り強く働きかけた結果，関係者の理解と

協力が得られるようになったいきさつが紹介された。
　講演会終了後も，参加者間の交流が続き，東広島市でのネットワークづくりを進める動きもみられた。
　主催者としては，予想以上の，しかも多様な参加者を得て，先進的な取り組みを詳細に聞くことができただけでなく，東広島市，呉市，海田地区に多数いる外国からの子どもたちの教育や支援を行っている関係者間の情報交換やエンパワメントに役立つことができたと思っている。

※②と同じ講演会を，平成 22 年度に小学校教師対象に以下の要領で開催しました。
③坪内好子先生講演会（2 回目）
テ ― マ　日本で学ぶ外国からの子どもたち
日時　　平成２２年８月９日（月）１４時～１６時
会場　　呉市総合体育館（オークアリーナ）
　　ミーティングルーム
講師　　坪内　好子先生
　　＊元大阪市立阿倍野中学校（帰国した子どもの教育センター校）
　　日本語・適応指導担当教諭
　　多文化な子どもたちの**学習支援教室「サタデイクラス」運営委員**
参加者　　教員等 32 名

【主催者報告】
・昨日大阪の坪内先生をお迎えして，講演会を開きました。白岳小の先生方が 22 名，その他の学校の先生が 2 名，広島から 3 名，東広島市役所から 2 名，そして，兒玉先生・高田君・私，合計 32 名の参加でした。先生方は異動が多いし，こうした研修はほとんどないので，毎年基本的な研修をし続けなければなりません。久しぶりに江口先生が来てくださいました。嬉しかったです。この夏休みから子ども支援教室を 2 か所開いた，東広島市の担当者が来てくださったのも嬉しかったです。子ども達が 30 人ほど通ってきており，広大の学生スタッフが４０名も参加しているそうです。前回の坪内先生の講演会から，トントンと話が進みました。よかったですね。福山の宮野さんが，今年 JIAM の子ども支援コースを受講すると言っていました。彼女はずっと子ども支援に関心を持ちながら，なかなか行動に移せないでいます。でも，何年か先には，県内の子ども支援をしているグループが集まって・・・
な一んて事も起きてくるのかもしれませんね。（ＭＩ）

④伊東祐郎先生講演会

テ ― マ　外国人の子どもたちが学習に参加するための「ことばの教育」
日時　　平成２２年１月２９日（金）14：30～16：30
場所　　呉市総合体育館　オークアリーナ
講師　　東京外国語大学　留学生日本語教育センター
　　教授　伊東　祐郎先生
趣旨　　日本語指導が必要な児童生徒が増加しており，この子どもたちへの適切できめ細かな対応が求められています。子どもたちに必要な支援は，「日本語」の支援だけではありません。日本語指導と教科指導をむすんで，学習活動に参加するための力を育成することを目的とした**「ＪＳＬカリキュラム」**から学びます。
※参加した教師の感想は，本研究プロジェクトには届いていませんので，開催要領のみを紹介します。

第４章　ブラジル本国との連携に関する研究（研究３）

研究３では，平成 21 年度に，伊藤さんと谷渕君を岐阜県可児市で開催された「カエル・プロジェクトセミナー」に派遣し，保護者会でその内容を報告しましたが，平成 22 年度には，セミナーそのものを呉市や東広島市で開催するなど，Dr.Kyoko Yanagida Nakagwa との連携が進展しました。

第１節　カエル・プロジエクトセミナー　in 可児市

中川郷子先生，二宮正人先生による「カエルプロジェクトセミナー」に参加し，滞日ブラジル人児童生徒の母国に帰国後の再適応上の諸問題とその対処法について学ぶことを目的に，伊藤美智代さんと谷渕真也君を平成 21 年９月 11 日～12 日，可児市可児市文化創造センターへ派遣しました。

以下に，セミナーの概要，視察日程，視察報告を紹介します。

1．セミナーの概要

KAERU PROJETO セミナー

日本からブラジルに帰国した家族・子どもたちの現状は？
帰国前にすべきこと，帰国後にやらねばならないことは何か？

ブラジルの現状はどうか？帰国した家族は？帰った子どもたちは直ぐに学校に入ることが出来，また問題無く順応出来ているのでしょうか？
サンパウロ大学の二宮教授に帰国した家族を取り巻く状況についてお話頂き，続いて，サンパウロ州で帰国児童のケアを進める活動「カエルプロジェクト」を進めておられる Dr．ナカガワにお話頂きます。

「カエルプロジェクト」とは？

サンパウロ州教育省とサンパウロ州 NPO 法人「教育文化連帯学会（ISEC＝Instituto de Solidariedade Educacional e Cultural)」が実施している活動。
（ブラジル三井物産基金の支援あり）
目的は，日本より帰国した日系ブラジル人子どもたちの健全な成長に向け，ブラジル社会への順応・スムースな学校への編入などを出来る様にするための支援です。

この活動を始めた理由は，日本で就労した（出稼ぎ）家族の子どもたちが帰国後，学校への編入の際に様々な問題が発生しているからです。特に，日本滞在が長期化し，日本生れの子どもたちもいるので，母語のポルトガル語の能力不足，日本とブラジルの文化・社会環境の違いからストレスや精神的・情緒的不安に悩む子どもたちが増えています。
そのための受入れ体制の整備（心理的・社会的・教育支援及びポルトガル語・ブラジル人社会の文化・習慣・ルールを教えるための補習など）が急務であり，このカエルプロジェクトはその具体的な活動の第一歩です。

今回は保護者の方々を中心にポルトガル語で進めます。ポルトガル語・日本語の同時通訳の準備も行います。
会場の方々との質疑応答の時間も設けますが，基礎的な質問はお配りしてある Q+A にありますのでそれを参考にして頂き，それに含まれないものに限定するようにお願いします

主催　三井物産株式会社
協力　NPO 法人　国際社会貢献センター（ABIC）

中川郷子（なかがわきょうこ）
心理科医サンパウロ・カトリック大学(ＰＵＣ－ＳＰ)修士号・博士号。
「カエルプロジェクト」コーディネーター

数年前から日本から帰国した児童の就学指導・ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞを行う「カエルプロジェクト」を主宰。

日本におけるブラジル人児童および青少年に関する著作多数。

二宮正人（にのみやまさと）

1954年1月に両親とともに渡伯。帰化ブラジル人。サンパウロ大学を卒業後，文部省国費留学生として訪日。帰国後，弁護士業務のかたわら，両国の大学で教鞭を執る。1992年より，国外就労者情報援護センター（CIATE）理事長。

毎年東京大学の集中講座で教鞭を執る。その他日本各地で数多くの講演を行っている。

2. 視察の日程

9月7日　群馬県太田市 場所：太田市学習支援センター 時間：18：30～21：00 連絡先：0276-62-6076 後援：太田市教育委員会（申請中）	9月8日　静岡県浜松市 場所：アクトシティ 時間：18：30～21：00 連絡先：053-458-2170 共催：浜松ブラジル協会 後援：浜松国際交流協会　協力：浜松市
9月9日　愛知県豊田市 場所：豊田市民文化会館小ホール 時間：18：30～21：00 連絡先：0565-33-5931 協力：豊田市 　　豊田市国際交流協会	9月10日　三重県鈴鹿市 場所：ふれあいホール 時間：18：30～21：00 連絡先：050-3532-9911 共催：NPO法人愛伝舎
9月11日　岐阜県可児市 場所：可児市文化創造センター 時間：19：00～21：30 連絡先：0574-60-1200 後援：NPO法人可児市国際交流協会	

3. 視察報告

日時：2009年9月11日～12日
伊藤美智代(ワールド・キッズ・ネットワーク代表) 谷渕真也(広島大学大学院教育学研究科)
9月11日 滞日日系ブラジル人家族のブラジル帰国後の再適応に関する情報を集めるため，岐阜県可児市文化創造センターで行われた，ブラジルの弁護士二宮教授と臨床心理学者中川教授の講演会に参加した。 講演会後，中川教授とブラジル人児童生徒の適応に関する調査研究及び心理学的支援のあり方について協議を行った。 9月12日 二宮教授，中川教授と共に可児市国際交流協会を訪問し，日本語指導セミナー等を視察した。 「ピア・サポート教室」の活動のフォローアップのため，高校卒業後に名古屋市に引っ越した子どもの家族と職場を訪問した。

報告者：谷渕真也

第２節　カエル・プロジエクトセミナー　in 広島

1. 開催趣旨

　ブラジルの現状はどうか？帰国した家族は？帰った子どもたちは直ぐに学校に入ることが出来，また問題無く順応出来ているのでしょうか？
サンパウロ州で帰国児童のケアを進める活動「カエルプロジェクト」を進めておられるDr.ナカガワが来日されるのを機会に，呉市，東広島市にもおいで頂き，講演や相談会を通して帰国児童生徒の抱える問題点などをお話頂きます。

2. セミナー①～④及び講師の日程

月　日 時間帯	11月4日（木）	11月5日（金）	11月6日（土）	11月7日（日）
午前	（岐阜県可児市より呉市へJRで移動。）		（呉市より海田町へ車で移動。） （10 時～12 時海田町主催講演会）	
午後	① 15時～17時 呉市立白岳小アミサージ等での指導助言 （17 時に東広島市へ車で移動。）	（東広島市よりJRで福山市に移動。）	（海田町より車で呉市に移動。）	④13時～16時 ブラジル人保護者の相談会（くれ市民協働センター）
夜	② 18時半～20時半 広島大学で講演（教育学部A617教室）	（福山市主催相談会予定）	③ 19時～21時 ブラジル人保護者会で講演（呉市広公民館）	（呉市より広島空港u市へ車で移動。）
宿泊先	東広島市	福山市or呉市	呉市	広島空港 （8日，広島空港-成田経由で帰国）

①中川郷子先生講演会

テーマ　　**ブラジルに帰国した子どもたちの現状**
日時　　平成２１年１１月４日（木）１８：００～２０：３０
場所　　広島大学大学院教育学研究科　Ａ６１７
講師　　Kyoko Yanagida Nakagwa(中川郷子)先生
　　カエル・プロジェクト代表（在サンパウロ）

【アンケートの結果】
カエルプロジェクト　中川郷子先生講演会　アンケート結果
1，満足度（アンケート総数16）
満足度5：14人，満足度4：2人
2，講演会に参加した理由
・カエルプロジェクトを以前から知っていたので，運営者の生の声を聞きたかった．今後の展望も知りたかった．

・子どもが母国と違う国に住むこと，その後母国に帰国することに関心があるから（自分が小一の時，親の仕事の都合でアメリカに１年半住んだことあり）.
・東広島市の多文化共生社会創成への参考になると思った.
・ブラジルに帰国した子どもたちの現状が知りたかった.
・市の職員として外国人支援を担当しているから.
・子どもの支援をしているから，話を聞きたかった.
・ブラジル留学の経験あり．日系ブラジル人の子どもたちに対するボランテイア活動をしているから.
・ブラジルで｛中川先生に｝お世話になったのでお会いしたかった．日本から帰国した子どもたちの現状を知りたかった.
・招待者として，日本語で話を聞いておきたかった（自分の所ではポルトガル語での講演なので）.
・知り合いに日本在住の日系ポルトガル人の友人がいるから.
・ブラジルのことが知りたかった.
・日系ブラジル人のサポート活動に参加している．根本の部分が理解できていなかったので，それが分かればと思った.
・在日朝鮮人の民族アイデンテイテイを研究中（大学院）．異文化間のアイデンテイテイ形成と援助に興味あり．ブラジルにも興味あり（特に音楽）.
・ボランテイア経験（呉）があるので興味があった.
3，一番印象に残ったこと
・子どもの問題は親に原因があると痛感．親の意識の欠如，周囲の無理解などが問題を深刻にしていると感じた．日系人の子どもで日本からブラジルに帰国する子どもが意外に少ない．少ないから目立たないというのが印象に残った.
・日本でもブラジルでも，子どもに十分な教育がされていないことを知ってショックだった.
・幼児教育の大切さ．幼児期の支援を適切にするべきということ.
・ブラジルへ帰国した子どもたちの厳しい現実.
・日系人の教育に対する考え方が想像したものと随分違った.
・ブラジルでも外国から受け入れた子の状況は日本と同じ.
・やる気があれば，ブラジルにいる方が良い（のではないか）.
・「教師も，自分の価値観を当たり前だと思わないことが，子どもと関わって行く上で大切」という点が印象的.
・子どもたちの現状を知ることが出来たこと.
・「新移民」という言葉．子どもたちの抱える問題の大きさに愕然とした.
・言葉だけでなく，文化，人間関係，価値観など様様な部分が身についていないので，｛子どもたちが｝大変苦労しているということが印象的.
・「かえる」の場所はどこなのか？ブラジルなのか日本なのか.「自分とは何か」という問いの答えを探しているのかと思った.
・何もないのに感じる偏見の？
・ブラジル人の親子さんが「教育についてはNoというのに，クリケットにはYesと言う」という話が驚きだった.
・ブラジルの方々を理解するまでには時間がかかりそう｛だと思った｝.
・ブラジル人が，日本の学校を“教育の場”として見ていないということ（日本での教育のありかたについて考えさせられた）.

・子どもや親にかかる負担がどのようなものか知ることが出来た.
・{カエルプロジェクトが} どのような活動をしているか知ることが出来た.
4, 今日の話があなたの今後にどう生かされると思いますか？
・日系社会が {ブラジルへの} 帰国児童に冷たいという話があったので, 日系社会がこういう子どもたちにシンパシーを持って活動できる内容を考えたい（ブラジル日系人の日本語教師研修を担当している).
・日本, ブラジル双方の情報が必要と痛感. 大局的に見る双方のコーディネーターも必要（だと思う).
・東広島市には中国人と {中国からの} 帰国者が多い. この人たちの居場所を作るような活動をしたい.
・できれば日本に暮らすブラジル人の子どもたちをサポートしたい.
・外国人の子ども向けの支援（日本語, 教科）を今年度から事業化している. その活動に {今日の話を} 生かしたい.
・子どもは“見守ってもらいたいと思っている”こと. 子どもたちに接する時はその言葉を肝に銘じたい.
・今後も, 何らかの形（通訳, ボランテイアなど）でブラジルに関わっていきたい.
・自分の生活に結びついているので, 今後もずっと考えていくテーマだと思う.
・専門知識を持った仲間を増やしたい.
・自分の町の児童・生徒の支援のあり方を再検討したい.
・日系ブラジル人の方との接点をもっと考えてみたい.
・見通しや背景を知りながら関わることが出来るようになる（だろう).
・ブラジル人の一生とは何なのか, 考えてみたい.
・日本の在日コリアンも, そのほとんどが自身の民族アイデンテイテイを確立することなく, 表面的には日本人として適応しているように見える. 実は内的には様々なコンフリクト {葛藤} を持っている可能性がある. そのあたりを支援する参考になった.
・今後ボランテイアとしてかかわっていきたい.
5, 意見, 感想など
・広島にいながら, 中川先生の話を聞くことが出来て良かった. また機会があったらよろしくお願いします.
・将来, 子どもの教育に携わる若い人たちに, もっと参加して欲しかった.
・勉強になりました.
・貴重な話が聞けました.
・日系人の実情が分かり参考になった.
・自分の居場所が見つからないことが, どんなに大きな問題であることか, 改めて考えさせられました.
・日系移民の歴史, アイデンテイテイのあり方についての知識が浅いので, 勉強したい.

【主催者の感想】

サンパウロ市の心理学者ナカガワ　ヤナギダ　キョウコ（中川郷子）先生をお迎えして,「カエル・プロジェクトセミナー（広島）」がスタートしました。昨日は, 白岳小の視察, 広大での講演会がありました。明日は, 広公民館でブラジル人保護者会, 7 日はブラジル人保護者相談会があります。

講演会の参加者は 20 数名で多くはなかったが, 大学教員, 学生, 民間団体のスタッフ, 行政職員, JICA のスタッフ, 新聞記者と多彩でした。

中川先生は，とても上手な日本語で率直かつ精力的に，ユーモアもまじえて，実に多くの貴重なお話をしていただきました。
私がもっとも印象的だったのは，先生のデカセギの子どもたちへの深い愛でした。
サンパウロ市でのカエル・プロジェクトには，意外にも国，州，市からの公的支援はなく，企業からの限られた援助，限られたスタッフで行われていました。しかし，先生はそれにもかかわらず，実に精力的に子どもたちの支援に取り組んでおられます。
先生のご専門は精神分析で，それだけをされていたら，自分のオフィスで高額な治療費を受け取り，優雅な生活ができるはずです。しかし，先生はそこにとどまらず，地域に出て多くの学校に入り，時にはバスに10時間もゆられて帰国後の不適応を呈している子どものところに通うこともされています。この度のように，飛行機に30時間近く乗って毎年来日され，東から西までブラジル人保護者への講演・相談ツアーを敢行されています。
今回の講演を通して，先生のそうした国や文化を超えた行動のベースに，デカセギの子どもたちへの深い愛があることを強く感じました。そして，私はかつて広島にもおいでになったマザー・テレサを思いだしました。気の遠くなるほどの多大な困難を抱えている人々に，強く深い不屈の愛情を注ぐことのできる人の大きさを，中川先生にも感じました。
（ＫＫ）
【セミナー全体の感想】
　カエルプロジェクト広島の全日程を終え，先ほど中川先生を見送りました。マルシアが来ていたので，空港まで送ってくれる事になり助かりました。あっという間の4日間，でも長い4日間でした。先生はいろんな地域，いろんな人に種を蒔いてくださいました。
それぞれの地域で，きっと動きがあるだろうと思います。私自身も，これからの活動を考える上でのヒントをたくさんいただきました。
中川先生は，「よかった，楽しかった」を連発して帰られました。（ＭＩ）

【主催者からのお礼】
　中川郷子先生へ。こんにちは。無事にサンパウロにお帰りになったとのこと，安心しました。かなりきつい日程で，相当お疲れになったと思いますが，お体の具合はいかがですか。10月19日から11月8日までの20日間の滞日期間のうち，広島で4日間のセミナーをしていただき，本当にありがとうございました。また，広島では，広島市，呉市，東広島市，福山市，海田町と走りまわっていただき，多くのブラジル人や日本人に会っていただき，本当にお疲れ様でした。中川先生をできるだけ多くの人に会わせたいという気持ちはわかるのですが，あまりに多くのことを中川先生に求めたので，中川先生がもう広島に行きたくないと思われたのではと心配しています。
私としては，同じ心理学者としてこれからも共同研究などができればと思っています。今後とも，どうぞよろしくお願いします。（ＫＫ）

発行日　平成 23 年３月31日

発行者　兒玉　憲一
〒739-8524
東広島市鏡山 1-1-1
広島大学大学院教育学研究科
心理学講座

印刷所　新和印刷有限会社
〒733-0012
広島市西区中広町 1-5-17

裏表紙　世界３大滝のひとつ　イグアスの滝
撮影　兒玉拓世氏